

○土肥委員長 それでは、第3回目の「こども・若者参画及び意見反映専門委員会」を始めたいと思います。今日もよろしくお願ひします。

今日は、若者団体の皆さんのヒアリングとぼんぱ一の皆さんの報告もあるということで、会場のほうは若者比率多めでやっております。

今日、初めましての方もいらっしゃるかもしれませんが、この委員会の委員長をいたします土肥です。よろしくお願ひします。

この委員会の冒頭でもお話をさせていただいたのですが、この専門委員会を進めるときに3つお約束というか、こんな委員会にしたいということをごちらに書き出しておられます、オンラインの皆さんは見えにくいかもしれないので口頭でお伝えをしていきますと、まず、参加している全員がこの場で対等であるということを一つ、いろいろな年齢の方もいらっしゃるけれども、対等であるということです。

2つ目は、全国のモデルになるような委員会を目指しましょうということです。いろいろな自治体や省庁でも恐らくこどもや若者世代が参加する審議会がどんどん増えてくるのではないかなと思うのですが、ある意味、ここの委員会自体がモデルになるような、やり方をすればいいのだ、円形でやってもいいのだとかいうことが各審議会に伝わっていくといいなと思っております。

そして3つ目は、分からないことを分からないと言える委員会にしたいなと思っております、進めながら、ちょっとその言葉は難しいなとか、なかなか議論についていけないな、ちょっと今分からないなということがあれば、ぜひ言っていただければと思います。完全オンラインだったということもありましたけれども、前回も途中で進行がすごく硬く進んでいって、途中でこれでいいのでしたかみたいな問題提起をいただいたりもしましたけれども、そんなことをこの場自体でもお互いに振り返りながら言えればなと思っております。

まず、出席者の紹介ということで、短くですけれども、一言ずつ言っていただきます。

まず、みんなのパートナーぼんぱ一のほうから、お名前だけ言っていってもらってもいいですか。

○やのちゃん（ぼんぱ一広報班） ぼんぱ一の広報班の中から参りました、やのちゃんと申します。お願ひします。

○ゆりなさん（ぼんぱ一企画班） ぼんぱ一の企画班から参りました、ゆりなと申します。よろしくお願ひします。

○めがみさん（ぼんぱ一運営班） ぼんぱ一の運営班の、ニックネームがめがみと申します。よろしくお願ひします。

○ゆいさん（ぼんぱ一企画班） ぼんぱ一企画班の、ゆいです。よろしくお願ひします。
（拍手）

○土肥委員長 こども・若者の社会参画のヒアリングということで、今日、3つの団体から来ていただいております。私の手元の順番ですと、五十音順ということだと思いますけれども、うらほろスタイル事務局の上田さん、よかったです一言自己紹介をお願いします。

○うらほろスタイル事務局上田さん こんにちは。うらほろスタイル事務局の上田と本間です。よろしくお願いします。（拍手）

○土肥委員長 よろしくをお願いします。

では、CoCoTELIのお二人。

○CoCoTELI平井さん NPO法人CoCoTELIの平井です。よろしくお願いします。

○CoCoTELI山縣さん 同じくNPO法人CoCoTELIの山縣と申します。よろしくお願いします。（拍手）

○土肥委員長 そして、持続可能な社会に向けたジャパンユースプラットフォーム(JYPS)から。

○JYPS田中さん 名前が長いのですがけれども、英語名でJapan Youth Platform for Sustainability、JYPSとまとめて言っています。共同事務局長の田中と申します。よろしくお願いします。（拍手）

○土肥委員長 今日の議事ですけれども、まず、「こども若者★いけんぷらす」のこれまでの活動についておよそ35分程度、その後、「みんなのパートナーぼんぱー」について35分程度、その後、こども・若者の社会参画について3つの団体からのヒアリングを80分というような2時間半で進めていければなと思います。よろしくお願いします。

冒頭長くなりましたが、まず「『こども若者★いけんぷらす』のこれまでの活動について」ということで、事務局のほうから御説明をお願いします。

○佐藤参事官 こども家庭庁で官房参事官をしています、事務局の代表をしています佐藤です。よろしくお願いします。

委員長、土肥さんが冒頭にも言っていましたけれども、私も前回の委員会は硬くなってしまったなと事務局ながらかなり反省をしまして、今回、事務局の中でこの委員会をやる時にも、まさに今、委員長が言ってくれましたけれども、これまでにないような全国のモデルになるようにと思って車座でやってみようとか、僕らもフランクな格好でいこうということで、僕も含めて今日は事務局もこんな形で参加をしています。どうぞよろしくお願いします。

いけんぷらすの説明は高山からまたお話をしますけれども、メディアの方もすごく関心を持ってきています。一方で、安心・安全に意見を言える環境をととても大事にしたいので、基本的には非公開にして、ただ、資料はなるべく分かりやすく作ったものを出すという形で、先日、こども大綱に向けた意見を聴くというので、そこは私が担当しているので、個別の参加者の方々に了承いただいた上で、公開してもいいよと言ってくれるこども・若者のテーブルは公開をするというような形で、メディアの方にも見てもらえるような形の工夫もしました。

かつ、今日これから御説明するのも、今までどんなことをやっていたとか、どんな工夫をしたりとか、事前の準備から事後のフィードバックのところまで、少し丁寧に資料を作って、事務局から少し御紹介をしようと思います。

これまで委員の方々にも見ていただいていますし、ぽんばーの皆さんにも見ていただいています、もちろんまだ、いいところと改善するところなんかもあると思うのですが、そういうのをまた遠慮なくいろいろなコメントをいただいて、どんどんステップアップをさせていけたらなと思っていますし、前の委員会するときも僕はお話ししたかもしれないですが、毎回僕のほうから事後にメディアの方々に、今日の委員会ではこんなお話がありましたよという話を御紹介をしています。なので、そういう意味もあって、なるべく分かりやすい資料を作って、この場で議論したことも含めて、全部僕のほうからちゃんとメディアの方々にも伝えて、世の中にも伝わっていくように、そんなふうにしていきたいなと思っています。

冒頭が長くなりましたが、資料の説明に入ります。

○高山補佐 事務局の高山です。本日もよろしくお願いします。

資料1をベースに説明をしていきます。「こども若者★いけんぷらす これまでの活動について」ということで、今まで何をやってきたかということをお説明していきます。

2ページになりますが、これまでに実施したいけんひろばということで、テーマ数としては12テーマ聞いてきました。延べの人数ですが、1,125人、1,000人以上の方に意見を聞いてきました。その中のテーマ、2ページ、3ページ、4ページまで書いてありますけれども、例えばこどもの居場所づくりの指針について意見を聴くとか、「若者と食の今後について考える」というテーマとか、いじめや不登校、自殺対策だとか、こども家庭庁が作ろうとしているこども向けのホームページのコンテンツについてとか、今、参事官の佐藤から話があったこども大綱についてとか、そういったテーマについて意見を聴く場というのをやってまいりました。

その中で、対面とか、オンラインとか、チャットとか、アンケートとか、出向く型という実際に現場に行ってお話を伺うというような取組をしてきました。

5ページを見ていただければと思いますが、これはいけんひろばをやる時の大まかな流れと注意してきたことを書いた資料になります。まず、意見を聴く前の段階ということで、何をやってきたかというところですが、1つは事前説明会をやっていますということです。参加者の年齢に応じた分かりやすい資料を作って、それをお見せしながら、事前説明会をやっています。そこで当日どういうことを聴きますということを示しながら、事前説明会を行うことで、事前に意見をつくる準備の時間を設けているということにしています。

また、実際、意見を聴く場の流れとしては、「いけんひろば（対面）の流れ例」というところに書いてありますけれども、まず、アイスブレイクの時間を設けています。また、対面やオンラインの場ではグラドルールというような形でルールをつくって、参加者同士

で議論を始める前に確認をして意見交換を行うということをしています。

また、グループごとに意見を言うような場を回していきますけれども、そういったときにも3人から6人という比較的少人数で、かつ、年代が近い人を集めて、意見を言いやすいような環境、雰囲気づくりに心がけているところです。

また、アンケートですと、参加者の答える人の年齢に応じて簡単な分かりやすい言葉を使った設問や選択肢をつくっています。また、チャットというのはいつでも意見交換、意見を出すことができるというのが強みですけれども、コアタイムというような時間をつくって、集中して活発な議論ができるような時間を確保しています。

以上が意見を聴くときの段階になります。

その聴いた意見をどうやって反映させるかというところですが、まずは寄せられた、出てきた意見を全部まとめて、書き起こしたようなものを「いけんのまとめ」として作ります。それを作った後に、一定程度重なる部分があれば、似たようなものもあるということで分類をしていき、報告資料を作ります。実際に反映をするかどうかというところの検討とか、参加者に向けてこういう意見が出てきましたということを報告できるような資料ということです。この報告資料を作って、これをベースに実際に反映を検討して、結果として、反映したかしなかったかというところの結果を示すようなフィードバック資料を作っているというような形になっています。

次に、6ページ、7ページを御覧いただければと思いますが、こちらは7月末、8月の頭でこどもの居場所づくりの指針とか若者と食の今後の実際に参加していただいた皆さんへのアンケートの結果です。

7ページを御覧いただければと思いますが、居場所づくりの意見を聴く場の参加者向けのアンケートの結果としては、100%の方から、いけんひろばに現場で参加してよかったと思うという回答をいただきました。また、9割近くの方には、自分で話したいこと、思ったことを言えたという回答もいただいているというところになります。

また、若者と食を考えるとというテーマについても、同じように高い評価をいただいているというような形になっています。

10ページ以降は、先ほど5ページで主な流れということで御説明をしたところの参考資料としてつけています。簡単にかいつまんで御説明をしますと、10ページの事前説明資料のイメージというところですが、まさに意見を聴く前の段階で、こういったテーマかというのを、当日向けの準備として説明をするというような形になっています。例えば17ページですが、実際に当日現場でこのような質問したいと思いますということをお伝えして、言うならばその準備をしてもらおうというような形で、意見を言いやすくしているというような形になります。

また、参考資料2、20ページですが、当日の流れを細かく書いています。議論を始める前に自己紹介をしたり、ちょっとしたクイズなどでアイスブレイクをして場を和ませる。現場で「初めまして」というような形でグループ分けがされているところですので、

意見を言いやすい、和んだ環境をつくるということを心がけているというふうになります。

参考資料3で、議論を始める前のグランドルールというところをつけています。22ページですけれども、例えば話したくないことや個人的なことは話さなくていいですよというようなこととか、25ページ、実際に意見を言った後には、撤回・修正ということができるようになっていますよということを事前に参加者にお伝えをすることで、意見を言いやすい環境に心がけているということになります。

続いて、報告資料のイメージということで、居場所の指針の最後、報告資料のイメージをつけています。これもちょっと長いので、かいつまんでの御説明になりますが、30ページですと、例えば家だとか学校だとかSNSだとか課外活動について、居場所だと感じる人は、そうとは感じない人というような形でカテゴリーに分けて意見を紹介しています。

また、32ページですけれども、居場所と感じるようになったきっかけだとか、過程だとか、そういったことをそれぞれ紹介するような資料を作っています。

こういったものをベースにしながらかつた、フィードバック資料を参考資料5として、つけています。例えば48ページを御覧いただければと思いますが、居場所だと感じるのと、場所がないと思う、なくなったと思うというような形で寄せられた意見というようなものが報告資料として、左側に寄せられた意見というものがございまして、こういったものを捉えまして、実際に素案としてこのような形で文を直しましたということを紹介するような形で、フィードバックをしているという形になります。

51ページですけれども、もちろん反映されなかった意見もございまして、そういったところについてはなぜできなかったのかということ。例えば広報宣伝の中で電車広告やコマーシャルでの広告というのは多くのお金がかかるのですぐには実行することは難しいですということを紹介したりとかいうような形で、反映されなかった意見についても紹介をしているという形になっている。

ざっとではございますが、事務局からの説明は以上であります。

○土肥委員長 ありがとうございます。

そうしましたら、このいけんひろばのいけんひろばに川中さんと原田さん、それぞれ視察に行かれたということですので、感想だったりとかをいただければと思います。

先に原田さんから。

○原田委員 今日もしろしくお願ひします。

いけんひろばに参加してみても、僕は8月の農林水産省のテーマの回と、あとは先日行われたこども大綱に対する意見を集めるいけんひろばに参加してきました。

感想として3つありました。

1つ目が、参加していた小・中学生から、こんなに意見を大人たちに聴いてもらえる機会は今までなかったのだということをも複数聞くことができました。このいけんひろばでどんな意見を聴くかということももちろん大事だと思うのですが、こうした意見を聴く取組があるということ自体を続けていくことが、まずは意見をこども家庭庁に言えば

意見を聴いてもらえるのだというふうな文化というか、そういったところをつくっていけないのかなということ、改めてこの取組の意義を感じました。

2つ目が、このいけんひろばで、これまでパブリックコメントとかではなかなか聴けなかった意見を、具体的には抽象的な意見に対してその場にいるファシリテーターが深掘りして意見が具体的になったりとか、あとはほかの人の意見を聞いて、その場で新たな考えが生まれて、そこで意見するみたいなこともありました。それはこれまでになかったところで、すごくよかったなと思いつつ、意見を聴く側だったり、ファシリテーターの姿勢とか技量とか考え方みたいなものが影響を与えることも大きくあるのではないかなと思えました。なので、ファシリテーターの養成みたいなところは、今、たくさんいけんひろばが行われていると思いますので、その中でどんどん蓄積していくことがとても重要なのかなと思えました。

最後に、いけんひろば、特に1回目のテーマが限定的な農林水産省のテーマみたいなところの際に、参加者の半分ぐらいは事前に準備してきているみたいなきどもたちが複数いて、意見を言う会という同じような言葉を使っているけども、その場で思ったことを言っている子と、すごく準備してきて言っている子と、いろいろな段階があるように思いました。なので、テーマをより絞って、何かもっと詳しい人たち、ちょっと詳しい人たちが集まる会だったりとか、テーマは全然知らないけれども、学びながら意見をその場で考えていきたいみたいな会とか、もう少し区分を分けられたり、時にはもうちょっと混ぜたりというのも今後できていけるのではないかなというのが今回参加しての感想でした。

以上です。

○土肥委員長 ありがとうございます。

川中さんもお願いします。

○川中委員 私も原田委員と同じく、農林水産省が担当省庁でありました「若者と食の今後について考える！」の対面のセッションに参加をさせていただきました。そこで考えたところを3点申し上げます。

まず、前提といたしまして、先ほどご説明にもありましたように、非常に努力を重ねて工夫を凝らしておられました。皆さんが心を砕いて、できるだけ若者・こどもにとって安心・安全な議論／対話の場をつくらうとする姿勢が徹底されていることは感じられました。そのことはよかったと思っています。その上で、現在行われている取組はこれから地方自治体等々で行われていくときに参照されるものになることを踏まえ、より高みを目指していく必要があるだろうという観点から意見を申し上げます。

1つ目は議題の設定についてです。こども・若者には少し難しいところがあるのではないかと感じられました。この農林水産省が設定した「若者と食の今後を考える！」というテーマは、例えば「こどもの居場所を考える」といったものとは少し違い、こども・若者にとってはちょっと距離感ができやすい。もちろん食と農は私たちの生活には欠かすことができないもので、ほぼ毎日接しているものです。けれども、食の安全保障などの議題に

なってしまいますと、これはかなり距離感が生じます。担当省庁の方々も心を砕かれておられたと思いますが、政策を提供する側／形成する側のロジックで議題が設定されている節は、やや否めなかったのではないかと思います。こどもや若者のリアリティーや生活体験の中から出てくるトピックから話を広げていく議題設定や話合いの展開の仕方については、より工夫ができたかなと思われまます。実際、現場で非常に興味深かったこととして、ファシリテーターはそういう話題を振っていないのですけれども、こども・若者からは給食の話が少し出ていました。企画運営側が考えている議論の想定では扱われないトピックだったりして、ファシリテーターの方もちょっと困惑しながら向き合う形となっていました。けれども、私はむしろそういう身近なトピックから食と農の今後を考えていくほうが、自然な流れに思われました。この辺りは、コーディネートをされる人々と担当省庁との間でのすり合わせがより丁寧に進められていく必要があるかと思いました。先ほど原田さんもおっしゃったように、今回は事前に資料をかなり読み込み、事前レクも受けてとかなり準備してきた人たちが多かったので、難しい議題設定でも場はまわりましたけれども、逆に言うと、参加者にそうした負荷が高い状況で成立したとも言えるのではないのでしょうか。

2つ目は意見反映のプロセスについてです。今回私が参加した場では、このテーマに強い思い入れや熱意がある参加者がいました。そういう参加者の姿を見たとき、意見をこの場で言ってもらい、検討結果を伝えるだけで終わるのはちょっともったいないと思いました。より対話性や協働性を高めていく意味では、「今日参加してみて、もうちょっと関わりたい」と思った人には、例えば手挙げ方式で作業チームをつくって、みんなから出た意見を担当省庁と一緒に整理をして、「こんな提案をしようと思うのだけど、みんなはどう考えるかな」と他の参加者と一緒にキャッチボールしながら、提案意見をまとめあげていくといった多段階にしていくことが考えられるでしょう。今は一段階で意見を聴いて返すという感じですが、何度も往復していく組立て方も今後考えていけるのではないかと思います。

最後に3つ目です。参加者の学びに関わるようになります。事前レクが丁寧になされて議題への理解が一定整ったわけでしたが、食や農の現場の感覚に接近できているかといえば、そういう人ばかりではなかったでしょう。生産現場に行ったり、農林水産業従事者の方の話の聞いたりしたことない場合もあるわけです。参加者にも非常に広がりがある。今回のテーマであれば、現場性や当事者性を一定は理解をする、そこに寄り添うかどうかは個々人の判断ですが、少なくとも理解しようとする姿勢の上で扱われていくことが望まれるテーマであったのかなとも思われました。どうしても省庁が作成する資料は、抽象度も高くなりやすく、包括的なものになっていくので、実際現場で何が課題となっているのかというところでの解像度をあげていくには、ハードルが高いものだったと思います。必須にすると参加のハードルが上がりますけれども、任意で現場の声を聴く機会などをつけたして場に臨めますよといった工夫などは今後考えられるのではないのでしょうか。

なお、時間がちょっと足りないかなというところもあって、ファシリテーターをされて

いる方々はそのことに窮屈さを感じているのではないかとも見られました。この辺も参加者の許容される範囲を踏まえつつ、ちょっと余裕があるぐらいで議論／対話をする場のつくりを今後検討していけたらよいのではないかと思われました。

以上です。

○土肥委員長 ありがとうございます。

こども若者★いけんぷらすは今、およそ4,000人が登録しているということで、今、1万人を目標にしているところかなと思いますが、今、いけんひろばについて特に意見が出されましたけれども、このいけんぷらす全体に関してでも御質問とか御意見があれば、委員の皆さんからと思いますけれども、いかがでしょうか。

○菊地（仁）委員 町田市児童青少年課長の菊地と申します。

今、川中さんのほうからお話がありました意見をもらって返す回数の話だとか、現場感というものだとか、テーマ設定についてお話がある中で、実は町田市でも政策反映という意味で、町田市の事業を市民の声を聴いてよりよくしようということで、町田市市民参加型事業評価というものを昨年度開催しています。これは経営改革室というところが主でやっていたのでありますが、そこの事例も少し参考になるかなと思ったので紹介をさせていただきます。

町田市市民参加型事業評価では、高校生が全体で6名、チームを2つつくります。大学の先生だとか、公認会計士だとか、一般の二十歳以上の大人の中にこどもたちが各3人入るということで、1チーム組むということなのですけれど、そのときに、どんな行政の取組を評価するのかというテーマ設定に当たるものを高校生に選んでもらいました。高校生にテーマを選んでもらうことは、これまでに2回やったことがあるのですけれども、1回目は、日常の流れの中で、朝起きて、御飯を食べて、ごみを捨てて、学校に通って、図書館に寄りながら帰るといような日常の風景を動画的に見せながら、ごみを捨てるというところでごみの処理場に関わるよねとか、トイレへ行くだけでも下水に関わるよねなんて、そういうような話をする。

そんな中で行政との接点を考えてもらって、どういうところに皆さんが興味があったり課題感があったりしますかというような話から始めて考えたということをやりました。

もう一回は、今度は大人とのコラボというか、町田市の全市民に送る市民意識調査というものをやるのですけれど、その中で都市のまちづくりというようなものの大きなテーマを6個設定したのですが、それに関連して、自分が課題感があるものとかを市のホームページでまず自分で調べてみて、興味があったこととか課題に思ったことを発表してくださいみたいな形で2022年度はやりました。

そうしたら、例えば団地の再生というような話が、実は自分のおじいちゃんが団地に住んでいるのだけれども、周りが少し寂しくなってきたらもうちょっと活気が欲しいみたいな話だとか、階段を上るのもちょっと大変そうみたいなものとか、帰り道がちょっと暗くてというような話があって、そういうものが心配だったので私はここに興味があり

ますというような話があった。それを市の事業に置き換えてみると、先ほど言った団地の再生というものにつながっていく。その団地の再生に関わる事業をみんなで評価してみようかというような流れでテーマ設定をやりました。それがテーマ設定についての話です。

あと、回数の話なのですけれども、こどもたちが事業を選ぶ回数だけで2回、それから、資料を作り込んでいく上で4回、本番があって、事業を改善しましょうということをまた2回会議体を設けて、事業所管の部署も全部呼びまして、そこで説明と意見交換をして、こんな意見が伝えたい、あとはこんな資料ももっと欲しいみたいな話をして、資料も作り込んで、あとはこんな改善案がありますよというのをやったときに、自分たちが思った改善案だったとかいうところも加味しながら、最終的に市で改善の計画というものを公表するというような流れをつくったというようなこともいたしました。

あと、現場感のところ、2019年にやったときには、市で用意できなかったのが申し訳ないのですけれども、対象の施設が気になった評価人の皆さんがその施設に実際行ってみたよというような話をされていまして、そうするとやはりあのときにはあまり人がいなかったとか、実は逆にこれだけ混んでいてというような話があって、その辺も含めてもっと来場者が伸ばせるかなんていう話がありました。そういうのも一つやり方としては参考になるかなと思ってお話ししました。

長くなってしまうのですけれども、最後に1つだけ。この事業についてなのですけれども、町田市も事業単位でいくとお金を支払うための財布みたいなものが市ではあって、それだけでも1,000以上あります。その全部をこのフレームにのせていくと、すごく職員側の負担にもなってしまうので、何かピックアップをすとか、こういうものを逆にやっていきたいという市の課題感みたいなものとフィットさせることで、より深い議論、そしてより納得性の高い議論ができるのではないかなと思いました。これから広げていく上では、意見を言う側も意見を聴く側もいい感じの負担感の中でやれるといいのかなと思いました。

長くなりましたが以上です。

○土肥委員長 ありがとうございます。

中村さんから手が挙がっています。

○中村委員 中村みどりこと、みーちゃんです。よろしくお願ひします。

本当に、いけんぷらすのこども・若者の皆様に敬意を表したい、こんな難しいテーマでみんな意見を出してくれているのはすごいなと思いながら聞かせていただきました。

1点だけ、もしかしたら事務局への質問になるかもしれないのですけれども、こども大綱についての出向く型の聞き取りについて、実際にこども家庭庁の人とかが行って、こどもたちに聴いていただいているのかなと思いますが、出向かないといけないということは、意見を伝えることなどのアクセスがしづらいこどもたちも多いというイメージを持っています。

出向く型がもしもう終わっているのであれば、こんな雰囲気だったよとか、今後もう少し出向く型も工夫できるよねみたいなことがあれば、聞かせていただけたらなと思います。

○高山補佐 私は児童養護施設の出向く型ということで行かせていただきました。小・中高生を対象に、9人の方々と意見交換をするのを拝見しました。ファシリテーターを中心に議論をしていただいた中で、率直な感想としては、いけんぷらすという事業の中で、ぷらすメンバーとして登録をしていただいて、このテーマについて意見を言いたいという方が集まった「いけんひろば」の場というところと、我々がいきなりお邪魔をして、このテーマについて意見を聴かせてくださいといったときの「出向く型」の違いがある。意見を言いやすい環境か否かというところもそうですし、実際に何か具体的にこのテーマについて意見を持っているかどうかというところの温度感の差みたいなのところはやはり感じたところでは。

どうやってそういう意見の言いやすい環境をつくるかということももちろんそうですし、そこをどうやって意見を引き出していくかということもそうです。対面だとか、オンラインだとか、チャットだとかという手法では、聞き取りづらい声を聴いていくという「出向く型」の位置づけの中で、さらにもっともっと工夫が必要なところかなというところは、率直な課題感としては感じているところです。

○加藤専門官 私のほうは、オンラインで実施したのですけれども、ひとり親家庭のお子さん方、小学生から20代の方までいらっしゃいましたが、お話を聴かせていただくというような形でつい先日行ったところに入らせていただいています、ひとり親家庭で育てられた方々ということで、経済的な面での課題感みたいなものが中心的に聞かれるのかなという想定で参加をさせていただいて、実際そういうお声もたくさんいただいたのですが、こちらで想定している以上にそれ以外の様々な課題をお持ち、社会的養護下にあった時期があるとか、いじめとかそういった学校での問題とか、経済的な面から派生して、周りと同じようなものを持っていないということで、それが学校での居づらさにつながっていったりとか、大きな課題を抱えておられる方がたくさんいらっしゃいました。こども家庭庁が直接お話を伺うということで、すごく伝えたいことをたくさん用意して参加して下さっていたなという場でしたが、事前にどういう課題をお持ちの方が参加されるのかということ細かく間に入らせて下さっている団体の方からも伺えていなかったのもあって、聞いてみたらかなり深刻なお話もたくさん出てきたというところで、ファシリテーターの方と一緒にもっと準備をできたほうがよかったですし、グルーピングも単に年齢ではない分け方をすべきだったのではないかと、かなり事務局としては聴く場の在り方は改善すべき点が多々あったかなと感じています。

伝えたい方もいらっしゃる。それをまたそこにいる子どもたちが聞くということを考えると、もう少し御本人の課題感とか背景と人数とかグループの分け方とか、どういうファシリテーターさんを充てていくのかということ、出向く型の場合はより丁寧に準備をしなくてはいけないかなというところは感じたところでは。

○土肥委員長 ありがとうございます。

中村さん、大丈夫ですか。

○中村委員 ありがとうございます。

実施したばかりなのに突然質問し、まだまとまっていないかもしれない中、丁寧に御説明いただきありがとうございました。

○土肥委員長 ありがとうございます。

実は時間がもう超過し始めておりまして、いけんぷらすのことと、この後、ぽんぱ一の皆さんから報告いただくのですけれども、ぽんぱ一といけんぷらすは同じ活動の中で動いているので、そこで、もし言い切れなかった方は、この後の時間の中でもいけんぷらすについて御意見いただければなと思います。そのような進行でよろしいですか。

では、議題2のほうに移らせていただきまして、「『みんなのパートナーぽんぱ一』について」ということで、まず事務局から御説明いただければと思います。

○高山補佐 引き続き資料2を御覧いただければと思います。

まず、ぽんぱ一についての概略と伺いますか、何ぞやみたいな話を簡単にさせていただいて、実際にぽんぱ一の皆さんにバトンタッチできればなと思っています。

「みんなのパートナー ぽんぱ一」と呼んでいますけれども、こども若者★いけんぷらすの事業をこども家庭庁と一緒に取組んでいただく方ということでお願いをしている方々でございます。ぷらすメンバーということで、このいけんぷらすの事業に登録をいただいた方のうちの希望者の中から、作文や面談を経て、21名の方をお願いをしています。

資料にもあるとおり、中学生から大学生、社会人までいらっしゃいますし、地域も北海道、東北から九州まで、全国から集まっています。

現在3班の体制に分かれていまして、運営班、企画班、広報班というそれぞれの役割に応じて御活動いただいているというような形になります。

それでは、ぽんぱ一の皆さんにバトンタッチしたいと思います。

○めがみさん（ぽんぱ一運営班） みんなのパートナーぽんぱ一、運営班のめがみです。よろしく申し上げます。

私は大学生で、大学では法律を勉強しています。めがみというのは、高校生のときに、先輩が目と髪の毛がきれいだからということでめがみとつけてくれて、それがめっちゃ好きで、今も使っています。ぽんぱ一では、このようにみんなニックネームで呼び合っているという感じです。

それでは、私からは、みんなのパートナーぽんぱ一全体の活動と、私が担当している運営班の活動について報告をさせていただきます。

資料の3ページを御覧ください。

まず、6月にプレミーティングとして初めてオンラインでぽんぱ一の中で顔合せと自己紹介を行いました。プレミーティングの前にチームの名称案をおのおの考えてきて、プレミーティングで話し合いをして、最終的にみんなのパートナーぽんぱ一という名前を決めました。

6月には、第1回合同ミーティングをこども家庭庁のこどもまんなかひろばで実施しました。そこで、運営班、企画班、広報班の中で、自分がどの班で活動するかを決定して、各班で顔合せと自己紹介などを行いました。このミーティングでは小倉前大臣とも、目指したい社会とか今後の活動について思いを語り合うことができました。

続いて、資料の4ページを御覧ください。

7月から現在までのぼんぱ一全体の活動について説明します。現在は2週間に1回程度、各班で班ミーティングを行っていて、合同ミーティングも2か月に1回行っています。合同ミーティングでは、各班での活動内容について、ぼんぱ一内で広報班がやっていることを企画班とか運営班の人にも分かってもらえるように、そういうことを共有していて、ぼんぱ一の活動がよりよいものとなるように意見交換をしています。

10月には、加藤大臣に、各班から今までの活動状況を報告するとともに、意見交換を行いました。

全体としてはこんな感じでざっくりですが、ぼんぱ一全体の活動について報告させていただきました。

ここからは、私が担当している運営班について報告をさせていただきます。

資料の5ページを御覧ください。

メンバーは、大学生の私、めがみを含めて7人で活動をしています。

これまでの活動では、先ほど紹介した合同ミーティングで、全体でミーティングをする際にぼんぱ一の中で司会をやっているのですけれども、それを運営班が担当していたりだとか、いけんぶらすについて意見を出したりしました。例えば時期や内容が近いテーマをメールでぶらすメンバーに案内したほうがいいねという意見とか、受け取る側がメールが多いとどれを見ればいいのか分からなくなってしまうのではないかなということ、案件をなるべくまとめて案内したほうがよいのではないかなという意見を出して、実際にそれらを反映されました。

また、運営班の中で、ぼんぱ一内でなかなかコミュニケーションが取れていないということで、会議でしかいつもぼんぱ一が話す場がなくて、会議だけだとなかなか意見が言いづらいのではないかなということで、運営班の中で、ぼんぱ一内でのコミュニケーションツールの検討導入を行いました。これは個人的にとっても大きなことだったのではないかなと思っていて、現在コミュニケーションツールはLINEのオープンチャットを使っていますが、会議以外でもメンバー同士で素直に意見を伝え合えるようになりました。

導入する前は、限られた会議の時間でしか意見交換をすることができなくて、メンバー同士の距離も遠かったように感じたのですが、導入されてからは以前よりも気軽に自分の好きな時間に意見を言えるようになったので、たくさん意見が交わされるようになったかなと思っています。

班ごとのチャットだけではなくて、全ての班が入っているオープンチャットもあるので、各班の進捗状況などを、もっとこれからオープンチャットで共有していけたらいいなと思

っています。

資料には書かれていないのですけれども、直近の運営班の活動について報告したいなどということがあったので報告をさせていただきます。

10月には、実際に私たち運営班としていけんひろばに関わらせていただきました。こども家庭庁のこども向けホームページについて、対面のいけんひろばに1名、こども大綱についてチャットのいけんひろばに6名と、対面のいけんひろばに4名が参加しました。

今までいけんひろばの様子を見たことがなかったので、どんなふうにかども・若者から意見を聴いているのかなというのが分からなかったのですが、実際にその状況が知れたということがとてもよかったなと思っています。

ただ、実際に参加してみて考えさせられたことがあって、それは私たちぽんぱ一の立ち位置がよく分からないということです。私たちはぽんぱ一でもあると同時に、いけんぷらすのぷらすメンバーというこども・若者でもあるのですけれども、自分たちがどういう役割を担ったほうがいいのかとか、どんなことをみんながぽんぱ一に求めているのかなというの、どうなのかなというふうに今、運営班の中で話題に挙がっていて、こども・若者である自分たちは、どこまで携わることが可能なのか、運営にどれだけ関わることができるのかなというのも難しいところだと思っています、ファシリテーターさんみたいに、勉強をしっかりとってきたわけでもないし、どのような形でぽんぱ一として運営ができていったらいいのかというのを今悩んでいるので、もし、このような役割を担っていくといいのではないとか、ぽんぱ一にこういうことを期待したいということがあれば、ぜひ皆さんの意見を聴きたいなと思っています。

今のことは、こども家庭庁の職員さんだったりとか、運営に入ってくれているサポーターさんとか、運営班だけではなくてほかの班の人とも話し合っていきたいと考えています。

最後になるのですが、私はぽんぱ一になって運営に関わることで、自分自身もとても成長しているなと思って、勉強になっているなと感じます。もちろん自分たちのやりたいということが、なかなか全て叶うというわけにはいかないのですが、こども家庭庁さんとかサポーターさんも、私たちの意見にしっかりと耳を傾けてくれているなということも感じています。

まだまだ手探りの中ではあるのですけれども、みんなで話を重ねて、みんなで認識を合わせて、同じ方向を向いて運営していけたらいいのではないかなと思っています。国の政策決定過程のこども・若者の参画促進の一つとして、たくさんのこども・若者に届いてくれるような制度になるように、これからも自分自身頑張っていきたいなと思っています。

以上で運営班めがみからの報告を終わります。

○ゆいさん（ぽんぱ一企画班） こんにちは。みんなのパートナーぽんぱ一、企画班のゆいです。それから企画班の発表を始めます。

まず、企画班の説明をします。

企画班は、中学生2人、高校生4人、大学生1人、社会人1人の計8名で構成されています。今回は私ゆいと、そちらにいらっしゃるゆりなさんと2人で発表させていただきます。

企画班は、ぷらすメンバーから提案があったテーマのいけんひろば開催に向けて活動しています。現在は、2週間に1回程度、オンラインでミーティングを行っています。

続いて、活動報告です。

8月29日から9月18日まで、テーマ案を募集するアンケートを実施しました。複数回答が可能だったので、全部で200人ほどから300件程度の回答がありました。

○ゆりなさん（ぼんぱー企画班） ここからは、私、ゆりなから、アンケートについてお話しさせていただきます。

お手持ちの資料にあるとおり、アンケートの期間は夏休みを含むように工夫をしました。ほかにもアンケートの回答率を上げる工夫として、できる限り文章の長さを短くしたり、小学生のぷらすメンバーにも中学生以降のぷらすメンバーにも読みやすいアンケートフォームとするために、1回目に振り仮名をつけた場合、2回目以降は省略するなどの工夫をして、読みやすくなるような工夫を行いました。

このような回答数が増えるような工夫をした結果、年代としては小学生から社会人まで様々な年代の方から、地域としては北海道から沖縄まで様々な地域の方に回答していただくことができました。

今後、11月上旬に2回目のアンケートを実施する予定で、その後、そのアンケートを基にテーマを決定する予定です。

いけんひろばでは、中学生から20代の方まで多くの方に参加してもらえるような時期に開催したいと思っています。

今は、12月にいけんひろばを開催できるように班活動を頑張っています。

これで企画班からの報告は以上です。

○やのちゃん（ぼんぱー広報班） 続いて、資料の7ページになりますけれども、ぼんぱーの広報班のほうから活動報告として、私、やのちゃんのほうから報告をさせていただきます。今日は活動のほうを直に熱く共有したいなと思い、参りました。よろしくお願ひします。

まず、広報班のメンバーについてなのですが、私たちは中学生2名、高校生2名、大学生1名と、私、社会人1名で構成されております。北海道から鹿児島まで、北から南まで日本各地に住むメンバーで構成されているということもあって、活動は月に1～2回、オンライン会議やチャットを駆使して活動しております。

広報班の活動について、主に2点ほど御紹介させていただきます。

班会議において、私たちはこれまでこども若者★いけんぷらすを知ってもらって、ぷらすメンバーを増やすための広報というところを検討してきました。ふだんどういったツ-

ルや関係者から情報を得るかというところで、登録時のアンケートデータなども参考にしながら広報班の班内で話し合っ、広報班では主にインスタグラムと旧ツイッター、XといったSNSで広報の活動を進めてまいりました。

これまでに2つのSNSを活用して、スライドにもありますように、第1回のミーティングであったりだとか、企画班さんがおっしゃってくださったいけんひろばのテーマ募集について広報をしてきました。

発信する上で大切にしてきたこととして2点ございまして、どの年代、特にこどもであったりだとか若者にも伝わりやすい文面というところを意識していること。あとは、いけんひろばが声を届ける大切な手段、こどもであったりとか若者それぞれの抱える思いを社会に伝えられる手段であるということ発信しております。SNSを中心にさらなる周知方法も今後話し合っければいいなと思っておりますし、ぜひ皆さんからも効果的な広報の方法というところ、御意見いただければなと思っております。

2点目に、今般のロゴ決定に広報班のほうに関わりまして、資料の右上にあるものがロゴになるのですけれども、運営班のぼんちゃんに作成いただいて、ぼんぱ一全体でアンケートを実施しました。広報班のほうで投票数であったりとか投票の理由のほうも加味した上で、最終的にこのロゴに決まりました。こども・若者の意見をポンプのように汲み上げたいというぼんぱ一のイメージにぴったりなもののできたのではないかなと思っております。

今後、また活用方法などを話し合う予定なのですが、主にぼんぱ一での広報であったりだとか活動時に使用していただければと考えています。

そして、後半の今後の活動、目標についてお伝えしますが、まず活動について、いけんひろばが先ほど御紹介があったようにウェブアンケートであったり、チャットであったり、オンラインであったりといういろいろな形態で行われているのですけれども、私たち広報班のほうもそれぞれの担当テーマを決めまして、取材をしたりだとか、こども・若者の視点でどのようなことが行われているのかというところを大切に報告していきたいなと今後考えています。

実際に10月14日に食育についてのいけんひろばがあっ、10月21日にこども大綱についていけんひろばがあっと思うのですけれども、そこにもぼんぱ一のほうから2名ほどそれぞれ取材に行きまして、実際に対面の様子を見学であったりだとか、運営のほうに携わらせていただきました。こちらのいけんひろばの様子については、現在進行形で広報案を作成しております。

広報班としては、いけんひろばの様子や感想をまずまとめて発信しまして、その後に1か月から2か月後ぐらいに、当日の取材の結果といけんひろばの報告の資料を踏まえて、意見が政策にどう反映されたかというところをこども・若者でも分かりやすいように発信していきたいなという流れになっております。

私も、先日のこども大綱のいけんひろばのほうに参加させていただきまして、小学生の

方から子育て中の方までいろいろな世代の方が様々なグループに分かれて話されていたのですけれども、皆さん共通して、自分のことだけでなく自分の家族であったりだとか、友達であったりだとか、あと将来のことをすごく深く考えていらっしやって、本当に小学生からも自由に意見が出ましたし、大学生からもすごく意見が出ましたしというところで、本当にいろいろな視点を得られたなと思います。

そのような様々な思いであったりだとか、意見が尊重された上で、こども大綱が真にこどもまんなかの中核をなすところになるように、皆さんでというか、今後まとめていただけたらなと思っております。

今後の目標についてですが、先ほど土肥委員長のほうからもありましたが、現在、登録者がいけんぷらすのメンバーが4,000人ほどというところで、私たちの目標としては1万人というところで、数のほうは具体的になっているのですけれども、より多くのこども・若者から意見が聴けるようにしていきたいと思っているので、また様々な角度から広報を展開していきたいと考えています。なので今後、皆様にもいけんぷらすの周知であったりだとか拡散というところ以外に、また広報の方法の提案というところをしていただけたらなと思います。

広報班の発表は以上になります。ありがとうございます。（拍手）

○土肥委員長 ありがとうございます。これで全部ですね。

そうしましたら、ぼんぱーを含めていけんぷらすも、先ほど時間がなかったので、ぼんぱーの皆さんからも課題意識の提起みたいなものもありましたが、委員の皆さんから御質問やコメントがあれば御意見いただければと思いますが、いかがでしょうか。

先にオンラインにします。黒木さんからお願いします。

○黒木委員 こんばんは。高校生の黒木碧恵といます。たまちゃんと呼んでください。よろしくお願いします。

私は現在、専門委員会と同時に、こども若者★いけんぷらすにもメンバーの一人として参加させていただいています。ですので、いけんぷらすに参加させていただいている側としての意見だったり、そこに参加していく中で感じた疑問について、大きく2つに分けて話させていただけたらと思います。

以前、委員会でもお話しさせていただいたことがあるのですが、昨年度まで開催されていたユース政策モニターというものにも私は参加させていただいていました。そこでは、意見の募集方法がアンケートとオンラインでの対話に限られていたというのもあって、政府から聞かれたことに答えているというような印象が強かったのですが、現在、こども若者★いけんぷらすでは、意見を言う方法も多様で、前回もこども大綱に関するチャットの会にも参加させていただいたのですが、様々な方法を使って自分の言いたい意見だったり、あとは言いにくい意見とかも考えたりしながら、ありのまま意見を言えるような仕組みがすごく整っていて、とても自分の意見を伝えやすい環境になっているなど感じて、いいなと思いました。

ただ、その一方で疑問に思ったところも幾つかあって、それを踏まえて4点ほど提案させていただけたらなと思いました。

1点目は議題の設定についてなのですが、最初のほうにもお話があったと思うのですが、時々問いが抽象的なことがあって、答えにくいなと感じることがあります。こども大綱に関するアンケートとかにもあったのですが、問いが漠然としていると逆に自由度が高過ぎて、どんなことを答えたらいいのかイメージがつきにくいところがあるのではないかなと思いました。

そこで提案なのですが、事務局側の方にも負担が結構大きくなってしまうのは課題かもしれないのですが、トピックの事前学習という形で、何か資料を添付して送ることができたら、どのような問題意識だったり、省庁がどのような文脈でどういう質問をしたいのかというのが理解しやすくなるので、そういった添付資料があると、理解を深めながら意見を言うことができるのではないかなと思いました。

2点目なのですが、いけんぶらすの内容ではなくて、それに参加を促すときに、今現在メールで案内が送られていると思うのですが、その方法についてです。私もメールを受信しながら、それを確認して、アンケートを送ったりしているのですが、メールだと流れてしまってとても見にくいというか、参加しづらいなと思ってしまうときがあるので、以前行われていたユース政策モニターでは、専門のウェブページが作られて、そこからアクセスできるようになっていたのも、そういう仕組みがあると一覧として見やすいし、分かりやすく、情報が流れることなく参加しやすいのかなと思いました。

あとは、先ほど広報班の方から疑問というか提案をしてほしいなところも一つあったのかと思ったのですが、SNSで現在広報が行われているということだったのですが、学校を使用した広報というのは可能なのでしょうかというところが一つの御提案というか疑問として思ったところです。

文部科学省の方とも、今後こども家庭庁さんが連携していくということだったので、学校の間を使って広報していくと、SNSなどどうしても興味がある子だけがその情報を見ることができると思うのですが、学校という場を活用すれば、もっと多くの人その情報を目にすることができるのではないかなと思いました。

すみません、ちょっと長くなってしまっているのですが、最後に1点いいですか。先ほどめがみさんが、ぽんばーの立ち位置が分からないとか、どこまで携わることができるのかということについてお話しされていたと思うのですが、その点について私もすごく共感していて、現在、専門委員会では今、高校生が1人、周りの若者の方もいらっしやったり、あとすごく参加して意見を発表しやすい環境があって、すごく参加しやすい環境ではあるのですが、同年代の人が少ないとどうしても緊張してしまったりとか、あとは私自身もそこまで専門的な知識を持っているわけでもないし、今まで主体的に何か特別な取組をしてきたわけでもないの、どういう立場からどんな意見を言っているのかというのがやはり私も分からないなというところは、結構委員会に参加する中で緊張してしまう要素の一つに

なっているなと思っています。

なので、今後、いけんぷらすのぼんぱ一の皆さんとももっと話をしながら参加することができたら、若者の皆さん、私もすごく意見が言いやすいし、あと実際に話し合った内容をよりダイレクトにいけんぷらすに反映しやすいのかなと思ったので、今後、来年度から専門委員会に若者、こどもを採用するのかというところにもつながると思うのですが、考えていただけたらなと思いました。

長くなりましたが、以上が意見です。ありがとうございました。

○土肥委員長 ありがとうございます。

非常に具体的で、すぐに生かせる意見もあったかなと思います。

学校での広報ということについて質問もあったかなと思うのですが、これはいかがですか。

○加藤専門官 文部科学省さんの御協力を得て、チラシのデータを各学校に自治体、教育委員会を通じて送付をお願いするという事はこれまで行っていて、その結果、学校単位でチラシを児童・生徒数送ってくださいというような御要望をいただいて、直接こちらからお送りしたりというようなことは、夏を過ぎたぐらいのタイミングでさせていただいて、それは一つ、ようやく学校まで情報を届けることができたなというところはあるのですが、決して全ての学校に送れているわけではないですし、どこまで受け取られた先生がどのくらい展開してくださっているとかというところも、まだまだ一部のところにしか届いていないというのが現状ですので、また来年度に向けても広報資材を作って、学校などと連携しながら、学校だけではなくて児童館だったり、青少年センターだったり、そういうこどもたち、若者たちがいらっしゃる居場所、現場に届けられるようにというところは計画をしているところです。

○佐藤参事官 簡単に補足だけすると、夏に、学校もそうなのですが、相当数チラシの電子媒体は配っています。物として紙を配ると現場の人が大変だみたいな意見もちょっとあったりするのですが、そこはまずは転送しやすい形でやって、お求めがある学校とかにはチラシそのものもお配りする。それは児童館なんかかなり手広くやりました。それは一発で終わらせるのではなくて、継続的にというか定期的にやりたいなと思っているのが一つ。あと、今年度の後半か来年度に入ってしまうか分からないのですが、こども基本法に関して学校とか児童館の現場で知ってもらおうと、職員が出向いて行って出張講座をしようとしているのです。その中でも、いけんぷらすのことも含めてアピールをやって、一人でも多くの方々に参加を募りたいななんて思っています。

○土肥委員長 ありがとうございます。

菊池さん、お願いします。

○菊池（真）委員 まりっぺと申します。

初めましての方、よろしく申し上げます。ぼんぱ一の皆さん、会ってみたかったので、よろしく申し上げます。オンラインですが、すみません。すばらしい発表、ありがとうございます。

ざいました。

ぼんぱ一の立ち位置、何だろうねという悩みというか課題にもぶつかっているというか、そういったところもあるのだなというふうに思ったのですけれども、ほかにも何か活動をここまでしてきて課題感を感じたり、皆さん学校とか仕事を終えてからミーティングしたりするのかなとかも推測しているのですけれども、やってみて、こういった若者参画の活動をしてみて大変さとか、こうなっていたらもっといいのかなという結構個人的な思いでもいいのですけれども、ある方は教えていただけるとうれしいです。

○やのちゃん（ぼんぱ一広報班） では、広報班のやのちゃんですけれども、大丈夫ですか。

○土肥委員長 どうぞ。

○やのちゃん（ぼんぱ一広報班） ありがとうございます。

先ほど黒木さんもおっしゃってくださったのですけれども、やはりSNSというところに関心がある層であったりだとか、あと、批判的に見る大人というところも見たりとかして、私たちがスポットとして狙っているこども・若者に届いているかどうかというところが、私たちが実感としてはなくて、いいね数であったりとかリツイート数というのは確認しているのですけれども、それが実際に本当にこども・若者のいけんぷらすの登録につながっているのか、声を上げたいという気持ちにつながっているのかというところが不透明でして、実感としては本当に自分の口で口コミで広げて、私、入ったよとかいう人を聞くとありがたいなというふうに思うのですけれども、広報をしている中でフィードバックといますか、そういったところが何か返しがあるといいなと、メンバーの増加以外にもあるといいなと思っていますし、こども・若者に情報を届けるというところで、やはり手元までというのがなかなか難しく、保護者の方の同意も得た上でいけんぷらすに参加ということなので、保護者の方が大分関わっている小学生の方とかも多いのではないかと推測してまして、そういった方にも普遍的に情報が届くようにというところが難しいなというふうに感じております。

○土肥委員長 どうぞ。

○ゆりなさん（ぼんぱ一企画班） 企画班のゆりなと申します。

先ほどの情報が届くというところに関する話なのですけれども、私は今現在高校生で、私が中学生のときに周りの友達とかにこども家庭庁だったり子どもの権利のことを知っているという話を聞いたときに、子どもの権利の名前は知っているけれども内容は知らないという人が本当に60%以上いて、今、企画班でもアンケートとかを募集したりとか、いろいろいけんひろばとかを実施したりいろいろしているのですけれども、実際にやっていることが、私の周りの友達とか同年代の人たちにちゃんと届いていないのかなというのが今すごく課題だと思っています。

○土肥委員長 ほかの皆さん、大丈夫ですか。

○めがみさん（ぼんぱ一運営班） それでは、私からは2点ほど課題かなと感じていると

ころがあるので、お伝えさせていただきます。

まずは、いけんひろば、ぼんぱーとして関わっていく中で、こども家庭庁さんとかサポーターの皆さんとの連携がまだぼんぱーの中でできていないかなど。ぼんぱーと大人の方との連携がまだうまくしっかりできていなくて、ぼんぱーとこども家庭庁さんとかサポーターさんの認識がずれてしまっているところがあるかなど。そこをもうちょっと連携していかなければいけないと思っているし、そこと話せる時間をもうちょっと欲しいかなど思っているのと、あとは私たちもいろいろなところに住んでいるので、いけんひろばというものに対面でこの前のこども大綱にも参加するとなったときに、遠い人だと参加しづらい、来づらくて、例えばホテルを取るにしても、この近くだと取りづらかったとか、集合するときに遠いところから来るとここまで来るのが大変だとかがあって、それは私たちぼんぱーだけでなく、こども大綱に参加してくださった地方の方とかも同じように感じていったところもあるのかなど思っているの、地方の方をここに呼んでというのはちょっと難しいというところもあるのかなど個人的に思っていて、もうちょっと地方で開催するいけんひろばが増えてもいいのかなどというふうには思っています。

以上です。

○土肥委員長 全国キャラバンすればいいですね。言うのは簡単ですけども。

では、オンラインでゆいさん。

○ゆいさん（ぼんぱー企画班） 企画班のゆいです。

私は、活動するときに、ぷらすメンバーとしてというのと、中でもぼんぱーとしてという視点を持ちながら活動することを心がけているのですけれども、ゆりなさんと似ていて、どれだけ多くの周りの人に伝わっているのかというのがすごく不安で、活動する中でSNSとかでどうしてもぼんぱーへの批判は目に入ってしまうので、それでしんどい思いをしているメンバーもいるという声も聞いたので、そこが大変だなと思っているのと、個人的なことなのですけれども、自分は東京に行けないことが多くて、対面では皆さんと会ったことがないので、距離を縮めるのが大変だなと思っています。

以上です。

○土肥委員長 ありがとうございます。

どうぞ。

○川中委員 ぼんぱーの皆さん、発表ありがとうございました。それぞれ1つずつ質問できたらなと思っていました。

先ほど運営班のほうでめがみさんが発表されて、どこまで自分たちが関わっていけばいいのだろうみたいな話があったのですけれども、運営班としてというのは難しいでしょうから、めがみさんとしては「ここまでやってみたいみたい」という希望があるのでしょうか。あるのであれば、この場でぜひ聞かせてもらえるといいなと思っていました。また、先ほどの報告ではこども家庭庁との連携がうまくいっていないという感じでしたが、どんなときに、もっとこんなふうになったらいいのにと思われたり、あるいは

自分たちはもっとここまでやりたいのに…と思われたりしたのでしょうか。思ったことを聞かせてほしいなと思いました。

ゆりなさんとゆいさんの企画班、お二人の話でしたね。アンケートを取っていて、工夫していっぱい集めたという話でしたが、集めたアンケートの中からどういうふうにこれからテーマを絞り込んでいこうとしているのでしょうか。今、どんなふうに考えているのかを聞かせてほしいなと思いました。そのときに、単に事務的にこういう段取りで絞り込みますというだけではなくて、ゆいさんなりゆりなさんが、こんなことを大切にして絞り込んでいきたいなと思っていることを教えてほしいなと思いました。

最後、広報班のやのちゃんさん、いきなりちゃんづけて呼んで大丈夫かな…。

○やのちゃん（ぼんぱー広報班） 大丈夫です。

○川中委員 やのちゃんから発表していただいて、気になったことがあります。広報班をされている方々にしても、今、ぼんぱーをされている方にしても、「やっていて面白いな」とか「こういう経験って新しいな」と思ったときがきっとあると思います。そこにはやりがいというものもあるかもしれないですけども、そういうメッセージは今、どんなふうに発信されているのでしょうか。今、こんなふうに進んでいますよとか、こういうふうに意見反映していますよというのは、言い方は悪いですけども別に省庁の人でもできる話でしょう。こども・若者当事者として、実際のところ「この辺が面白いね」など感じるものを表現することは大人にはなかなか難しいことで、その辺りをどういうふうにされているのかなというのかが聞けたらいいなと思いました。

○土肥委員長 では、めがみさん。

○めがみさん（ぼんぱー運営班） やってみたいこと。できるとしたら、運営班の中だったら、会議を今、大人の方が、サポーターさんが司会をやってくれていて、運営班の会議とかも仕切ってくれているのですけれども、それをこどもというか私たちだけでやってみたいという意見が運営班の中でまず一つ出ているのと、こども・若者の皆さんに向けてというか、ぷらすメンバーに向けてどういうことをやっていきたいかなというのと、運営班の中では、専門的なことを勉強してはいないから難しいかもしれないけれども、ファシリテーターとかができたらやってみたいなというふうに、自分たちの同年代とか、ちょっと小さい子とか、なかなか意見を言えないけれども、ファシリテーターさんよりも私たちがちょっと同年代というか近いので、意見が聞き出せるのではないかなということをやってみたいなというふうに、ちょっと難しいかもしれないけれども思っているのかなと。勉強しているわけではないから、どうなのだろうな、その辺ちょっとうーんという感じがあるので、それをやってみたいというのと、あとは今後やっていきたいこととしては、メールの文面だったりとかアンケートの文面が、私の運営班には中学生の子もいるのですけれども、中学生のメンバーからしたらちょっと読みづらいなと感じるところがあったりとか、アンケートもちょうと答えづらいなとか、難しい言葉があるなというところがあったので、そういうのを先に運営班とかで見させてもらって、こども・若者、私たちの

意見として、もうちょっとここは分かりやすくしたほうが届くのではないかなとか、そういうのができたらうれしいなと思っています。

以上です。

○川中委員 どれも難しくはないと思います。大丈夫です。

○ゆりなさん（ぼんぱー企画班） 先ほどのアンケートをこれからどういうふうに絞っていくかというところなのですけれども、これは今週の班会議で話し合ったことでもあるのですが、今、アンケート数が200件来ていて、それをどのように絞っていくかというのをこの間の班会議で話し合いました。そこであった意見は、全部を提示して、ぷらすメンバーに選んでもらうというのと、こっちの中で少し絞ってから選んでもらうというのがある、それを班会議で話した結果、200件から選んでもらうというのは、ぷらすメンバーにとってすごく負担になってしまうと思うので、200件の中にテーマごとの15個のカテゴリーがあって、そのカテゴリーの中から、ぼんぱーと事務局の方とサポーターの方で少しピックアップして、数を絞った中からぷらすメンバーの方から選んでもらうというのを考えています。

これは、アンケートいただいた中から、200件ある中からこっちで決めてしまうというのもちょっとなと思ったのと、でも、ぷらすメンバーの方に負担をあまりかけたくないというのがある、そういう方法で選ぶことにしました。

ピックアップする基準というのは、私たちの中でどういう基準で比較すればいいかというのを話し合った結果、いろいろな年代の人、小学生でも社会人でも話しやすいトピックというのと、背景知識がなくても話しやすいトピックを選んでいきたいなというのを今、話しているところです。

○やのちゃん（ぼんぱー広報班） 御質問ありがとうございます。

面白さであったりとかやりがいというところなのですけれども、まさに先日、加藤大臣とお会いしたときに同じことを問いとしていただきまして、面白さとかやりがいを考えておいてくださいという問いをいただきまして、私個人としては、こども家庭庁さんであったりだとか、運営の事務局の方であったりとか、あと全国の本当に中学生から大学生までというところと関わりながら、意見交換しながら進めていけているというそのプロセスにすごく面白いなというふうに感じていまして、けれども、やっけて面白いなという気持ちを確かに御指摘どおり発信というところまで持っていったいなかったなと思いまして、今、いけんひろばが開かれていて、その広報をというところをお伝えしたのですけれども、結構そういったことで皆さん普通に学業であったりとかもある中で並立してというところで、発信の頻度というものが今のところ少ないなというふうには思いまして、そこから来る認知度の低さ、ぼんぱーの実態がつかめないというところもあるのかなと思いまして、広報班自体が今、チャットを中心に動いまして、全体会議であったりだとか広報班の会議を割と頻回に設けて、やはりこういうところはやっけて楽しいよねというところ全体で共有しながら、それも同じくその熱量で発信であったりとかしていけたらな

というふうに、御指摘いただいて思いました。ありがとうございます。

○川中委員 オフで話したりとか集まったりする場とかもあるといいですね。今、タスクのために集まっているので、仕事しているみたいな感じがあるので、遊びもあると、そういう熱量とかも工夫とか出てくるかなと思います。そういう意味では、一人一人の得意なこととかやりたいこととかで、大人が決めた班と仕事だけやるのではなくて、皆さんで勝手に係とかをつくってもいいと思います。

すみません。ろくでもないことを言っていると皆さんに思われるかもしれないです。

○佐藤参事官 どんどん言ってください。

○土肥委員長 では、紅谷さん、お願いします。

○紅谷委員 ありがとうございます。

紅谷といいます。紅さんと呼んでください。

ぼんぱ一の皆さん、発表ありがとうございます。

僕からは、質問というよりは現状共有みたいなものになるかもしれないのですが、僕自身は医療的ケア児と呼ばれるこども・若者と関わる活動をしています。そういう僕と一緒にいるこどもたちというのは、今回のいけんぷらすなどで意見を言うこととすると、恐らくオンラインや集合というよりは、出向いてインタビューするスタイルに入る子たちかなとは思っているのです。ただ、その子たちの言語の習得状況とかコミュニケーション方法も様々で、出向くスタイルなら十分コミュニケーションが取れるのかということ、それも実は難しい場面も結構あるこども・若者たちです。

ただ、僕は現場でその子たちといろいろなコミュニケーションを取っているのですが、大人とその子たちでコミュニケーションを取ると、この子は何を言いたいのかちょっと受け取れないと思うときでも、同年代のこども同士とか若者同士だと分かる分かるみたいになっているシーンを結構よく現場で見かけます。今のいけんぷらすの仕組みとかぼんぱ一の立ち位置みたいなことで、すぐにそういうところに出向いてくださいというわけにはいかないとは思っているのですが、医療的ケア児みたいなこどもたちの意見を聴く方法というのは、こども家庭庁職員や専門家がやる分野だから任せておけば大丈夫というイメージには思わずに、実は職員や専門家もとても困っているというか、その子たちの意見をしっかりキャッチする方法に関してまだ確立されていない部分が結構あって、ただ、本当に同世代の子たちが同じ波長でしゃべっていると結構把握してもらえることが多いということも僕は現場では気がついているので、何かいい形で医療的ケア児というこどもたちとか、または聴覚障害とかも含めたちょっと言葉、コミュニケーションスタイルが言語という方法だけではない子たちに関する意見聴取に関しても、皆さんの世代が関わってもらったり意見をもらえるとより深まるだろうなと思って聞いていました。またそういう話もどこかで検討できる機会があればなと思いました。

以上です。

○土肥委員長 ありがとうございます。

○佐藤参事官 一言だけいいですか。

○土肥委員長 どうぞ。

○佐藤参事官 紅谷さん、ありがとうございます。

今回、こども大綱の意見を聴く取組の中で、出向く型というので初めて障害児支援施設に行きました。僕自身ではなくて加藤が行ったのですけれども、そこは発達障害の子たちに話を聴く形にして、施設の職員さんがすごく工夫をしてくださりながら、いい雰囲気の中で意見を聴けたと聞いています。

めがみさんがさっき言ってくれた同年代のこども・若者というのも、今の紅谷さんの話とも関係するのですけれども、僕もこども家庭庁をつくるときからずっと、この枠組みをつくっていくときから、大人のファシリテーターみたいな方とは別に、年齢が近いお兄さんお姉さんのという言い方なのか、そういう役割の方々が出たほうがいいよねというのはずっと思っていて、まだ今はできていないのです。だから、めがみさんのお話はすごくうれしかったし、同じことを僕も考えているので、一つ一つ一緒になって、いろいろ試行錯誤もあると思うのですけれども、できたらいいと思うし、そういう中で紅谷さんが今おっしゃってくださったような障害のあるこどもたちとも、まさに同年代の子がお話を聴くとか、少しプロの方も入るとか、いろいろなことを組み合わせたらいいなと思いました。

ありがとうございます。

○土肥委員長 ありがとうございます。

まだ御意見がある方もいらっしゃると思うのですが、次の議題もありますので、これは事務局の皆さんとまた御相談できればなと思いますが、ぼんばーの皆さんとも今日顔を合わせて雰囲気が分かったので、いけんぷらすについて、この専門委員会でも集中的に議論する場がどこかで持てたほうがいいのではないかなと思いました。

あとは、町田市さんの先ほどの事例もすごく参考になるところがあるなと思いましたし、政策反映という意味では、既に自治体が先行している部分があると思うので、町田市さんを含めて自治体からの発表というか話題提供みたいなものもこの専門委員会の中で扱っていけると参考になる部分があるのではないかなと思ひまして、また相談できればなと思います。

すみません。では、まだ言いたいとか質問したいという方もいらっしゃるかもしれませんが、次の議題に移らせていただきたいなと思います。

最後、議題の3番で「こども・若者社会参画についてのヒアリング」ということで、3つの団体の皆さんから話題提供いただきたいなと思っております。

まず、事務局のほうから説明いただけますか。

○高山補佐 簡潔に今回のヒアリングの位置付けだけ御説明させていただいて、それぞれの団体の方々にバトンタッチできればと思います。

委員の皆さんはもう御存じだと思いますけれども、専門委員会の考えるべきことという

ことで、子ども・若者の意見を言うような機会をどうやって守るかですとか、そういった社会への参画の機会をどうやってつくっていくか。また、そういうムードをどうやってつくっていくかですとか、関係する方々とどう連携するかみたいなところを考えていくというのが、この専門委員会のミッションになっているところでございます。そういう中でまさに社会参画だとか意見反映というところに取り組みされている、それぞれ、「地域に根差して」ですとか、「より広い規模で」ですとか、「個別の社会課題に関して」ですとか、取り組まれている団体の皆さんのお話を聞いて、議論を深めていきたいというような位置づけとしてこのような場を設けているというところでございます。

簡単ですが以上です。

○土肥委員長 ありがとうございます。

そうしましたら、うらほろスタイル事務局の皆さんから、それぞれ10分ずつで話題提供いただいて、最後まとめて質問等と意見交換というような形にさせていただければと思います。

では、うらほろスタイル事務局の皆さん、お願いできますか。

○うらほろスタイル事務局本間さん 改めまして、皆様こんばんは。北海道十勝にある浦幌町というところから参加させていただいております。うらほろスタイルという事業を行っておりますので、その中の取組について一部御紹介させていただきます。

「子どもの思い実現事業」というお名前の事業について御紹介をさせていただきます。

私ともう一名、上田の2名で役割分担しながらお伝えさせていただきます。

自己紹介は省略させていただきます。

浦幌では16年前、高校が募集停止になったり、近隣町村との合併が破談になったりという地域の存続の危機感に直面しまして、そのときに、こどもの声を聴いて、こどもを真ん中に据えたまちづくりを進めていこうという判断を16年前に行いました。その結果、これまで16年間積み上げて、こどもの声を聴いて、こどもを真ん中に置いたまちづくりを行っていった結果、地元への愛着ですとか社会に対する当事者意識、担い手意識を持った若者がたくさん育ってきました。

何名か御紹介させていただきます。

町内唯一のそば店、後継ぎがないから閉めるということになったときに、この若者はそば屋になりたかったわけでも飲食を志していたわけでもないのですけれども、地域の食文化を守りたいという理由でゼロから修行を行って、二十歳で店主として経営を引き継ぎました。

この子も今、23歳ですけれども、町長に意見を提出する事業に参加していました。今の若者と同級生です。自らを育んだ地域の大人たち、自分の声を聴いてくれた大人たちの背中を見て、憧れと感謝の気持ちを持って、自分を育んだ地域の高齢者の支援ですとか、同じく自分が今度は大人になって、こどもたちの教育支援を行っていききたいということを志してUターンしてきた若者です。この子も、本当に小さい頃から地域の大人に意見を聴い

てもらったり、育んでもらって、育ってきました。

この子は、家業が電気屋さんなのですが、手伝いながら、ライフワークとして教育ですとかまちづくりの活動に積極的に、日常的にボランティアで参画してくれたりしています。

この子は、半農半Xの働き方モデルづくり、それから持続可能な次世代に環境資源を残すために環境再生型農業の在り方を模索するというような形で担当者として活躍してくれています。

この子は大学生ですが、起業し、地元を誇れる町にするということを実現するために、今、札幌の大学で経営の勉強をしています。

この方は、高齢となった先代から地元のレストランの経営を25歳で引き継いで、その後、今年30歳になりましたけれども、Iターンの若者を巻き込んで、指定管理から大手が撤退した後、担い手がいなかった地元温泉の経営を引き継いでいます。

このような形でいろいろな若者が育ってきたのですが、彼らがどんな育みを受けてきたかということをお紹介させていただきたいと思います。

基本的には「子どもの思い実現」ということで、名前のおりで、こどもたちの思いを大人が形にしていくという取組なのですが、先ほどの議論で皆様方も繰り返しおっしゃっていましたが、意見を言いやすい環境の整備というものは、私たちもとても大切だと思っています。とても時間をかけて、丁寧にやっています。どれぐらい時間をかけるかというと、浦幌では8年間の時間をかけています。小学校1年生から中学校2年生まで、義務教育の中に、地域の大人が日常的に関わる仕組みをつくって、8年間かけてこどもと大人の信頼関係と絆を育んでいきます。

中学校3年生になって、大人に対する信頼感をきちんと育んだこどもたちが、今度は自分たちを育んだ町に対してどんなことができるかというアイデアを考えたりだとか、アクションを起こしたりしまして、その思いを大人に託す発表会を中学校3年生で行います。実は年に1回の発表会なのですが、それは今日の午前中に行われました。

そこで、今度はこどもたちが考えた思いを大人がしっかりとバトンを引き取って、こどもの思いを実現していくために、大人が今度は頑張る番ということで、月に一度、「子どもの思い実現ワークショップ」というものを行っています。町民有志のワークショップで、充て職などは一切ありません。こどもたちのために実現したいという思いを持った様々な立場の大人、いろいろなお仕事をしている人がいます。月に1回、仕事が終わった夜の時間に集まって、こどもたちの思いを形にするためのワークショップを行っています。年に10回ぐらいのペースで行ってまして、今年の8月に100回目を迎えることができました。

その結果、いろいろなものが実際形になっています。こういったキャラクター、こどもたちが考えたものです。マンホールですとか、バスのデザインですとか、写真にはありませんが着ぐるみがあったり、いろいろな町の至るところの看板に使われています。隣町の人は誰も知らないキャラクターなのですが、浦幌町民は赤ちゃんからおじいちゃん

おばあちゃんまでみんなが知っているキャラクターになっています。

それから、豪華ゲストをお招きして左上は大迫傑さん、その隣が朝原宣治さんが写っているかと思いますが、うらほろマラソンというものを去年、今年と実施しました。今年は全国から1,000名のランナーたちが集まってきました。これもこどもたちからの意見を反映したものです。

町の花ハマナスの化粧品ブランドを立ち上げるために、地域商社も立ち上げました。こどもたちのアイデアを実現させるための会社をつくりました。

こういう中で、こどもたちは実際どういうふうに思っているのかということ、実際映像があります。テレビで紹介していただいたときの映像がありますので流したいと思います。当時、高校3年生の子の言葉です。

(動画再生)

やはりこの町は、僕たちのこういう活動をこどもの活動だと受け流さないで、しっかり真剣に検討してくれる、すごい温かい町なので、大人になったら、次は自分が浦幌に戻ってきて、サポートする側に立って、どんどん若い年代からもこの町を盛り上げていきたいなと思うので、大人になってもこの町にいたいなと思います。

(動画終了)

○うらほろスタイル事務局本間さん この子は高校を卒業した後、今、農協の職員として町で頑張っていますけれども、大人から意見を聴いてもらったことで、しっかりと社会に対しての当事者意識、世代間の信頼関係を築いた上で、地域の担い手になっていく、社会の担い手になっていくということが、既に形になり始めているのかなと思います。

ここまでは事実ベースの御報告でしたので、ここで上田とバトンタッチしまして、引き続き御紹介を続けたいと思います。

○うらほろスタイル事務局上田さん 最後に私のほうから、浦幌のこの取組の特色を少し私たちなりに整理してお伝えしたいなと思います。

浦幌の取組の特色は、まず1つ、大人とこどもの日頃の関わり合いの土壌の上に思いが繋がれている点かなと考えています。急に提案をするという関係性よりは、いろいろな大人と関わりながら、いろいろな世代が関わりながら過ごしてきた中で、提案と、それを実現するというプロセスがなされている点の一つの特徴かなと思います。

それから、大人側に目を向けると、一人でも多くのこどもの願いをかなえたいと思って、大人がわいわい寄り合って、実現に向けて知恵を絞っているというところも大きな特色かなと思っています。

政策反映とは少し違って、町の草の根の活動として何が実現できるかなというのを知恵を絞っていますので、何か1つに決めなくていいとか、組み合わせを考えてみてもいいという自由な発想で、大人がわいわい取り組んでいるという特徴があります。

このように、草の根で始まった取組を、後に町が、行政が事業として位置づけて、持続発展をサポートしてきています。

冒頭に紹介させていただいたように、このような大人の取組を、大人の姿を見てきた、味わってきた次世代が、今度は自分たちも預けるだけではなくて一緒にやってみたいとか、担ってみたいなどという思いを持つようになって行動を移している、その点が、世代間で願いとその実現という循環が起きているという特徴と整理できるかなと思っています。

このように、想いが受け継がれていくことで、持続可能な社会づくりというのが可能になっていっているのではないかな、その端緒が開かれているのではないかなと考えています。

最後に、この委員会の検討事項、先ほど事務局の方からも御説明がありましたけれども、大きく政策反映のための御意見表明機会の確保と、多様な社会的活動への参画機会の確保の在り方を主な検討事項とされているかなと思います。浦幌の特徴としては、直接的には②のほうに大きなインパクトがあるかなと考えていて、様々な世代が自ら担っていく担い手となるということも含めて、多様な学びと参画が実現しているかなというふうに思います。

大人のほうも関わる中で、自分の町とか社会について学んで参画するということにつながっているかなと思います。

①についてですけれども、今、浦幌の現状としては、これだけを目的としたツールというのは置かれていないことになるかなと思います。ただ、草の根の活動の結果として、公的な事業に結びついていることがあるというのが1つ。

それから、その前提としてになるかもしれないのですけれども、そもそもいろいろなことに意見を表明しやすい信頼関係の構築はなされてきているかなと思います。

今、浦幌としては、こどもとか次世代を大事にしたまちづくりに共感する人とか組織が集まり始めているところです。内外、出身者、それから外からそんな町に引かれて集まってきた方も含めて、この春の統一地方選で複数の若手女性町議も誕生しています。そういうところを見ると、①、②を含めて、双方向いい循環がこれからますます浦幌では生まれていくところかなというふうに考えていて、直接的な政策形成もですし、草の根の民間も含めた社会活動もですし、それぞれを引き続き私たちとしても支えられるように取り組んでいきたいと考えています。

以上です。ありがとうございました。（拍手）

○土肥委員長 ありがとうございます。

次に、CoCoTELIの皆さんから発表いただければと思います。

○CoCoTELI平井さん 話させていただきます。CoCoTELIです。

まず、僕の自己紹介からさせていただきます。

僕は今、関西大学4年生で、4月から大学を休学している平井登威といいます。今日は静岡の浜松から来ました。

僕自身の原体験として、幼稚園の年長のときに父親が鬱病になって、虐待だったりとか、今、ヤングケアラーとすごく言われていると思うのですけれども、その情緒面のケアと

かを経験してきました。

CoCoTELIという団体は、ずっと学生団体でやってきた団体なのですけれども、今年の5月に法人化をして、精神疾患の親を持つ25歳以下の支援だったりとか、居場所づくりを行っています。

目指しているのは、精神疾患の親を持つ子ども・若者支援の土壌をつくるというところで、今、日本においてこういう子たちを対象とした支援は本当に空白の領域なので、そこに取り組んでいきたいと思っています。

活動内容とかは本当にオンラインで、スラックとかを使って居場所みたいな感じでやっていたりだったりとか、その中で性に関することであったりとか、キャリアとかメンタルヘルスとか、必要だけれども届きづらい情報を、当日参加しなくても録画配信とかで届けることで、いつでもそういう必要な情報に接続できるようにしていることだったりとか、あとは定期的にそういう場を開いていくことによって、何かあってもあの日になれば行く場所があるみたいな安心感とかがあったりするのではないかなと思っています。

あとは個別相談みたいなものもやっていて、一緒に考えるみたいなのところをすごく大切にしているのですけれども、その中で断ったり、ノーと言ったりだとか、あとは人を頼るみたいな練習とかにもなっているのではないかなみたいなところを思ったりしています。

今まではずっと学生団体で、お金とかもどこからも取らずにやっていたのですけれども、5月に法人化してから本格的にやっていくというところで、来月からソーシャルワーカーさんとかも非常勤ではあるのですけれども入ってもらったりして、より支援文脈を強くしていきたいなと思っていて、必要とする情報とか、知る、選ぶ、使うのハードルはそれぞれハードルがあると思うのですけれども、その知るを選ぶというところのサポートはオンラインでもできると思うので、そういったところのサポートをしていきたいと思っています。

今までの人数とか、ここら辺はどうでもいいと思うのですけれども、簡単に、僕たちが取り組んでいる社会問題について話させていただきます。

まず、精神疾患の親を持つこどもは、ほかのこどもに比べて自身の罹患率が2.5倍高いと言われていて、メンタルヘルスの影響が大きいと言われています。その中でも僕たちはそれを1倍にしたいと、分かりやすく言うときはこうやって言っているのですけれども、そういうこどもたちはすごく少ないように感じたりもするのですが、実際に16~23%とされているぐらい、かなり多くいる存在というところで、けれども見えない存在となっているという現状があると捉えています。

僕たちが、何で2.5倍高いのかというところの課題設定を2つしたところで、1個は見えない存在となっているため支援とつながらないというところで、偏見とか助けてと言うことは難しいみたいなのところとかもあったりすると思うのですけれども、最近、ヤングケアラーとかでも相談窓口みたいな待つ支援というもの、僕たちも今現在はそうなのですけれども、そういったものはすごく増えていると思うのですけれども、待つ支援は当事者の自

覚と助けてと言う勇気を前提とされていると僕たちは捉えていて、それが果たしてできるのかと言われたら、できる人たちは一部だよねというところと、あとは、この問題はそもそも問題として認知が低かったりとか、また、キャッシュポイントとなるところがなかなかない問題なので、資金面のハードルが高いというところはあると思っていて、この問題、僕たちは国が取り組むべき問題なのではないかなと捉えています。

あと、この最後のところも後でちょっと話すのですが、貧困とか虐待、ヤングケアラーみたいな誰が見ても問題という状況になるまでなかなか支援を受けることが難しいというところで、逆にその一手手前の予防的な観点から、早い段階で早期発見・早期介入することができたら、そういった二次的な困難も減っていくのではないかと捉えています。

実際に、ヤングケアラーの相談窓口に当事者からの相談がゼロみたいなどころとかもあつたりもしているというところで、待つ支援だけでは駄目だよねということは分かるのかなと思っています。

僕たちはその中で、社会側から当事者に気づいてサポートする仕組みをつくっていきたいと考えて活動しています。

ここら辺の補足は飛ばしていくのですが、17枚目のところなのですが、日常的な困難と二次的な困難というめちゃくちゃ適当に作ってしまったスライドなのですが、二次的な困難、さっき言った貧困とか虐待とかヤングケアラーみたいな困難というのは、起きてからの支援は一定あると思うのですが、そのもうちょっと手前の慢性化した言語化しづらい困難とか生きづらさみたいな日常的な困難な部分はなかなかサポートが少ないなというところを思っていて、でも、それが積み重なっていくことで二次的な困難につながっているケースはかなり多いのかなと思っています。

実際に僕たちがつながっている当事者の子たちも、貧困とかであつたりとかヤングケアラーみたいな状況にいる子たちもかなり多くいるというところで、もっと早い段階で気づいていく。僕たちが今やっているのは対症療法的なところではあるのですが、そのもう一個手前のところ、気づくというところは必要なのではないかとということと、その仕組みさえできたら予防的な観点でもっと支援が進んでいくのではないかとということも思っています。

日本には全然支援がなくて、海外とかではかなり進んでいて、左下のスウェーデンの団体とか、去年見に行かせてもらったりもしたので、僕達が参考にしている団体です。

今後やっていく必要があると捉えていることと書いてあるところは、僕たちは社会側から当事者に気づいてサポートする仕組みづくりをするために、事例をつくって提言していくみたいなどころをやっていききたいと思っています。

これも複雑なのを逃げてこういう簡単なものにしてしまったのですが、まず1個やりたいところが、当事者の子どもたちが見えない存在となっているというところで、例えば親が病院とつながっていたときに、そこで子どもに気づくことはできるはずで、でも、

今は患者単位でしか見られていないというところ。けれども、家族が大変な状況にあったりだったりとか、うまくそのコミュニケーションを取ることができずに、より家庭の状況が深刻化していくみたいなケースとかはかなり多いのかなと思っていて、もうちょっとここは家族単位で見られたらいいのではないかみたいなところを僕たちは感じていたりもします。

医師とか支援者とかの意識次第でそういう子どもたちに気づけるか気づけないかみたいなところが決まってしまうという現状があると思っていて、それが仕組みとして気づいて、家族を丸ごとサポートする仕組みをつくっていくべきなのではないかというところを感じています。

サポートする社会資源がほとんどないというところは、さっき言ったみたいにキャッシュポイントになる場所がないので、かつ、予防的な観点からの支援にもなっていくと思うので、本来国がやるべきところなのではないかというところで、僕たちはNPOとして提言していきたいなと思っています。

①のところで、予防的な観点で仕組みづくりを行うことによって貧困や虐待ヤングケアラーみたいに二次的な困難が減少する可能性はあるよねというところと、また、経済効果とかもかなり期待できるのではないかみたいなところも思ったりもしていて、今は少子高齢化とかが進んでいて、今後の労働という面でもかなりいろいろな問題があったりすると思うのですけれども、その2.5倍高いメンタルヘルスへの影響を低下することができたら、そういった子どもの立場の人たちが、仕事だったりとかを休職退職みたいなのところのリスクも低下できるのではないかみたいなところを思っていたりもします。

活動の中で感じたことを今から話していくのですけれども、活動を進めていく中で居場所と支援のニーズは全然違うなというところはすごく感じていて、居場所ですつながりみたいなところで孤独感が解消されたりだったりとか、親はまじでうざい、死ねみたいな、ふだん話しづらい、社会から許容されづらいことを話せる場あることというのはすごく安心感があるのだなということを感じています。

対して、支援ニーズみたいなのところもあったりすると思っていて、ただ、それは必ずしもつながったときから持っているわけではないというところで、関わっていく中で、長期的な関わりの中で、困り事だったりとか、言語化されて具体的な支援を必要とする当事者みたいなのところがいたりだったりとか、また、地方となったときにどうしても交通費の問題だったりとか、田舎に行けば行くほど子ども・若者の母数が少ないので支援団体の少なさみたいなのところもあったりとかすると思っていて、オンラインの中でどうやって支援を構築していくかみたいなのところも今後の課題かなというところを思っています。

その中でも、居場所と支援は別物だということ僕たちは思っていて、もちろんフェーズによっては一緒にすべきフェーズとかもあったりすると思うのですけれども、支援を前提とした場になることで、状況改善が目的となって、当事者の子どもたちは安全・安心に過ごすとか声を上げることが難しくなってしまうのではないかと感じていて、支援を

目的とした居場所みたいな文脈で話がどんどん進んでいってしまうことは結構多かったりするのかなというのを思っているのですけれども、これに対していろいろ感じることもあったりするということだと思います。

もう一個のスライドが、さっき言ったみたいに継続して定期的にかかれていた場の重要性はすごく感じていて、来ないからやめるではなくて、来やすいように工夫みたいところで、来ないのにも来ない理由とかがあったりすると思うのですけれども、その1つに、今は必要ないからというところ。でも、今は必要なくても、いつか必要とする場面とかがあったりすると思うので、不定期で開催するとかというよりは、定期的はこの曜日、この時間にやるよみたいところが決められていたほうが、当事者にとって安心感があるのではないかというところだったりとか、また、継続的なつながりを選べるということの重要性とかも、この後、山縣が話してくれると思うので、ここは飛ばします。

あとは、さっきちょっと出てきたこととつながることなのかなと思うのですけれども、専門性との役割分担みたいところで、専門性を持った人たちはすごく身近ではなくてハードルが高かったりすると思うのですけれども、今、ヤングケアラー支援とかを見たりもしていても、どうしてもつながるところから支援をするところまで同じ人がやらなければいけないみたいな、専門性が高い人がつながるところのハードルをどれだけ下げられるかみたいところで、あまり得意ではない人とかもいたりすると思うのですけれども、得意ではない人が不得意なところをどれだけ考えても得意な人には勝らないと僕たちは考えていて、それであれば、つながるのが得意な人たちと支援をするのが得意な人たちの接続を考えていく必要があるのではないかと思っていて、専門性の高い人たちはハードルが高い中、僕たちがつながりやすい人だったとしたら、僕たちの信頼できる専門性の高い人たちが、当事者の子たちにとっては信頼できる人の信頼できる人になるのではないかと思っていて、こういった間に入る存在はすごく大事なのではないかなというのを思っているところです。

あとは、自分を主語にして一緒に考える時間とかがすごく大事だなと思っているところと、オンラインとオフラインのいい面、悪い面みたいところはうまく使い分けていく必要があるのではないかというところを思っています。

日常的に声を聴くことだったりとか、日々の関わりがとにかく大事、その継続的なつながりの中で声を聴けるのではないかというところは、特に僕たちが出会っている人たちとの関わりの中では感じています。

ただ、こうやって僕たちも話しているのですけれども、僕たちが今、出会えている当事者の子たちは、さっき見えない存在となっているみたいところでも言ったのですけれども、自分が置かれている状況を自覚できていて、かつ、助けてと言える当事者たちであったりだったりとか、スクールカウンセラーさんとかとつながって、僕たちにそこからの連絡が来てつながった当事者たちであるというところで、見えない存在となっている当事者だったりとか、聴けていない声というのはたくさんあるというところは常に自覚的でなければいけないなと思っています。

その中で、必ずしも支援団体とつながって声を伝えるみたいなどころではなくても、日常的な関わりの中でぱっと出てくることもあったりするかもしれないというところもあったりはすると思うのですけれども、でも、声を聴くというところを考えていくときに、その一歩手前のどうやって見えない存在となっている人たちに気づくのかという仕組みづくりをしていくということはもっと向き合っていくべきところなのではないかというところを思ったりもして、こども大綱の中間整理案とかにも、見えない存在となっている、こういう存在みたいに書かれたりはしていると思うのですけれども、そういう子たちにどうやって気づいて、どうやって声を聴いていくのかみたいなどころはもっともっと議論が進んでいったらいいなというところは個人的に思ったりもしているというところで、この、山縣も話すのですけれども、僕からの最後のところは、精神疾患のある親を持つこども・若者支援を充実させていくというところに関しては、親との対立構造をつくっていきたくないというわけではなく、精神疾患のある方が安心してこどもを望んで育てることができる社会にもつながっていくのではないかと考えていて、こういったところ、ヤングケアラー問題だったりとかほかの問題とかも含めて、対立構造を生まない啓発だったりとかもすごく必要なのではないかなというところを感じています。

山縣は、僕たちが当事者として出会った中で今、運営に入っているメンバーなので、この後ちょっとだけお話ししてもらいます。

○CoCoTELI山縣さん 僕のほうからも軽くお話しさせていただきます。

改めまして、NPO法人CoCoTELIの山縣と申します。

僕も今、平井からあったように、当事者としてCoCoTELIには出会って、母親が精神科を患っていてという中で出会いました。そのような中、僕からは当事者として、CoCoTELIに出会って、子どもの権利とかを発信していくようになっていった過程と、最後、日々活動の中で感じていることみたいなどころをお話しさせていただきたいなと思っています。

まず、僕はインターンをしていた会社の掲示板でたまたまCoCoTELIを見つけて、CoCoTELIがヤングケアラーという発信の仕方ではなくて、精神疾患の親を持つ25歳以下のこども・若者というレベルで発信していたから、自分が初めてそこでそうだったのだという、まずは認知のところができたというところがすごく大きかったなと思っています、今、平井と話していくだったりとか、CoCoTELIと出会っていく中で、本当に初めてそこで自分自身が経験してきたことはケアだったのだということに気づいたということが本当に大きかったなと思っています。

今、自分自身も、去年CoCoTELIと出会って、今、こうしてCoCoTELIとしても働いているという感じなのですけれども、自分自身の感情だったりとか、嫌だと思うことは嫌だとか、さっき自分自身を主語にしてという言葉もあったのですが、そういうところは徐々に、僕のもともとの性格の部分もちろんあるのですけれども、非常にそういうところはできていっているようになっていくなと自分でも感じるし、CoCoTELIでやると決めたのも1個、自分の声として判断できたみたいなどころはあるのかなとすごく思っています。

38枚目に行くのですけれども、必要だなと感じているのは、今言ったように、自分自身が置かれている状況の認知だったり、言語化できる仕組み、あと継続的なつながりはすごく大事だなと思っていて、これは僕自身の体験になってしまうのですけれども、ケアをしていたときはいろいろな機関、地域の警察だったりとか保健所の皆さんだったりとかにお世話になっていたこともあるのですが、継続的なつながりというのは僕自身も助けを求めづらかったみたいなどころもあるし、かといってそのような方々を責めているというわけではなくて、こどもたちが声を上げやすくだったりとか、なぜ声を上げられなかったかみたいなどころに向き合っていく必要はしっかりあるのだろうなというところで、CoCoTELIが目指している地域からの社会からの発見の仕組みをつくっていくみたいなどころは絶対に必要だなと思っているので、僕もCoCoTELIでその仕組みをちゃんとつくっていけるようにしたいということで、日々そういうことを感じながら、見えない声をちゃんと拾っていけるような仕組みをつくっていききたいなと思っていますというところが、僕の体験からの日々感じているところです。

長くなってしまいました。申し訳ありません。（拍手）

○土肥委員長 ありがとうございます。

最後、JYPSの皆さん、お願いします。

○JYPS田中さん 改めまして、持続可能な社会に向けたジャパンユースプラットフォーム共同事務局長の田中梨奈と申します。

1枚目に、For the Meaningful Youth Engagementというふうに、最近スローガンを掲げていて、意味のあるユースの参画というのを掲げています。

まず、私の事務局のことをお話しして、最後のページで今後のことをお話ししたいなと思っています。

まず、JYPSですが、ここに書いていないことを先に言うと、国連でのメジャーグループというのがあって、そこにChildren and Youthというのがあって、そのある意味日本支部としてスタートを2015年にしました。

SDGsが策定されてから、SDGsを基軸にしながら、今現在、ポストSDGsだったりとか、外務省と協働していろいろなことを考えているというところです。市民社会にその声を届けていくためのプラットフォームで、30歳以下をユースとして定義しておりまして、今、高校生、大学生、大学院生、社会人の30歳以下の事務局員と一緒に活動しています。

ビジョンとミッションというところですが、「社会のすべての構成員が、公平に自らの意見を政策に反映させることを通じて、衡平で公正な社会が実現された世界を目指します」。ミッションとして、「若者の意見を集約・調整する自治民主的な仕組みの設立、管理、そして改善することを通じて、若者が政府や国際的な枠組みに対し、その意見を反映させることを実現させます」ということで、国連総会の中でメジャーグループのChildren and Youthが活動しているように、日本の若者の声を集約して、よりポリシーに近い形で日々国際と国内のチャンネルを使い分けながら活動しているという形です。

事務局体制についてお話しします。ここの辺りはそれこそぼんばーの皆さんとかと少しいろいろ論点がかぶるところもあるのかなと思ったりするのですが、事務局は主に4つの部署で成り立っていて、私、事務局長、もう一人共同という形で2人体制でやっているのと、政策提言部と普及啓発部、総務部と4つに分かれています。他のニュース団体や他の市民社会のNGOの皆さんと協働したりしながら、政策提言を日々練ったりとかして、かつ、メリスだったりいろいろなチャンネルを使いながら、加盟員、加盟団登録を受け付けていて、そこでプロセスを組みながら、最終的に日本で言うと最近では外務省や環境省、そして今回こども家庭庁も含まれるようになったりとか、国連であればECOSOC、経済社会委員会だったり、UNDP、国連開発計画を含めたチャンネルを持っています。

これらの活動を簡単に説明します。最近、コロナ禍でオンラインベースの活動が多かったのですが、気候変動関係ではUNDESAとかUNFCCCの話があったりとかもしますし、日本政府で一応SDGs実施指針というものがあまして、それに関する民間構成員として今現在も活動していますというのが①で何となく言えることかなと思います。

②では今年、日本はG7の議長国だったというのもあって、その傘下にあるエンゲージメントグループ、W7、WOMAN 7とCIVIL SOCIETY 7のC7に参画したので、主に政策提言のプロセスに参加しました。

また、IGES、気候変動のシンクタンクと協働したりとか、開発に関することで国際協力局の審議官に手交したりとか、いろいろやっています。

一番最後の3番目に関して、特に右3つの写真が一番最近の活動なのですが、今年、4年に一度のSDGsサミットが国連で開催されたのに当たって、一連のプロセスを進めました。およそ100名の参加があったウェビナーで、意見をそれぞれ安全保障の話とか平和の話、気候変動の話、ジェンダーの話などを4回のウェビナーと分けて、かつ、一番最初のウェビナーでは各セクター、例えばトヨタの気候変動を担当されているビジネスセクターから1名とか、ジェンダーではJOICEPの方1名とか、そういうふうにして呼んで、セクターの方からレクチャーを受けた後に、ユースだけで議論するという、ユースだけの主体性を担保した状態でオンラインで議論しました。

その後に、実際に政策提言をうちが書いて、かつ、パブリックコメントを小規模ですがやって、最後にユースサミットということで国連大学で開催させていただき、外務省の総括官に手交するという形になって、そのできた政策提言を代表者がニューヨークに行って、他のメジャーグループのユースの方々と交流しながら配ったりとかして、一連のプロセスを踏む政策にちゃんと若者の声を届けさせてもらうというのをやっていました。

これからのJYPSということですが、これまでも築いてきたチャンネルに、しっかり国内の会議に出つつ、かつ、国際的にSDGsをしっかりと達成しようとするために、準地域、地域でハイレベル政治フォーラム、かつ4年に一度だったり、次の年にSummit of the Futureという未来サミットという別の枠組みがあるので、しっかりその中でいかにプロセスを踏んでいくかというのを大事にしていきたいなと思っています。

その中で、課題感というところもあって、今後のプロセスでの軸というのを課題も含めて提示しているのですけれども、私たち自身、こういうことをやっているのは一部の人間であるし、属性もある意味偏っているのではないかな、多様性に欠けるところがあるのではないかというところを自戒の念を込めて思っています、なので、他セクターや国内外、地方など、都市とかも関係なく、しっかり分野横断で連携していかなければならないなということをまず肝に銘じなければいけないなと思っています。

これは先ほどのぼんぱーの話とも重なるかなと思うのですけれども、世代交代したりとか、ふだんの学業があってやっていることなので、いかに持続的にやるかというのは非常に難しいところかなと思います。なので、持続性をどういうふうに担保するかというのは日々の論点であります。

かつ、政策というのは難しい話なので、アクセスがどういうふうにできるかというところを私たちの中でひもときつつ、解説をしたりとか、そういう必要もあるのではないかな。

また、アドボカシーのキャパシティービルディングとありますが、こういうことをやるということがまず可能なのだということとか、私たちの声がしっかり意味があるという、自信を持って、しかもポリシーにしっかり落とししていくというプロセスをどういうふうにやったらいいかというノウハウのところとかもできるだけシェアしたいなと思っています。

私たちは国際のプロセスにも関わっているのですが、日本の中ではなかなか論点にならないような気候変動の見えていないところだったり、世界の貧困であったり、開発の部分というのをしっかりフォローアップ、勉強していきたいなと思っています。

ここで第11条のところをあえてクローズアップさせていただきました。ある意味、この法律ができたことによってJYPSの活動も裏づけされていて、非常に歓迎しているところではあります。ただ、若者や子どもというところで、どうしてもこれをいかに政治的に担保していくかというのは非常に論点が見えないところかなというか、まだまだ課題があるのではないかなと思っているので、それを踏まえて最後のスライドにいっぱい詰め込みました。

これは恐らくぼんぱーの先ほどの運営のときの課題感と結構重なるところがあるかなと思っています。

まず1つ目ですが、理解を増進しましょうと。結構ここも抽象的な文言ばかりで恐縮なのですけれども、皆さん、ぼんぱーのメンバーの方々の声を聞いたときにすごく思ったのですけれども、私たちも事務局内ですごく議論することですが、何か社会から期待されている若者像を私たちが演じたくあるときがあるというか、演じてしまいたいというか、演じたいというか、何か見本があったらいいなとか、見本があるというのが架空であって、それに近寄っていかなければいけないのではないかなというような変な責任感が生まれることがあります。それは本来求められている姿ではないと思っています、私たちが言いたいことや私が不満に思っていることを自由に言うべきだと思うので、それでこそ意見の表明であると思っています。もう少しぼんぱーの皆さんには自信を持って自分たちのやりたいこ

とをしっかりと子ども家庭庁と協働してやったらいいのではないかなと思っています。

そういう意味で、サポートとか教育の欠如というところを投げかけさせていただきました。海外では主権者教育と言ったりとかすると思うのですがけれども、世界のデータでも、若者が社会を変えられる自信があるかどうかというのは結構低いというデータが出ていて、これは別に日本に限らないので、それはもう日々、それこそ文科省の皆さんとも子ども家庭庁はしっかり協働していただきたいなと思っていますところでは。

2番目、「意味ある・継続的な」ユースの参画の実現というところですが、今回お呼びいただいたときに、できるだけフランクな形で参加していただきたいのだと参事官から言われまして、それは非常にいいことかなと思っていましたし、高校生もいるということで、それはいいことだと思いました。ただ、いろいろな人が出入りする、もちろん若者でも世代交代をするので、子ども家庭庁の皆さんも世代交代されますね。子ども家庭庁のある意味というのは、次世代の意見を政策に反映し続ける責務があつてある意味設立されたわけですので、今ここにいるぼんば一の皆さん含め、私たち含め、10年後ももう一度、あのときの子ども家庭庁で語った事実や経験はよかったのかどうかというのをしっかり長期スパンで考えられるような仕組みづくりやその責任があるのではないかと、その意味も込めて評価や透明性の確保という文言を次に書きました。

先ほどのぼんば一の皆さんに言えるのは、ふらすメンバーでもあるということですがごく悩まれていらっしやいましたけれども、そこであのときに言ったこととかは未来でどういうふうに活用されるかなとか、少し解釈、言い換えたりとか、どういうふうに子ども家庭庁の職員の皆さんと仲介するかとか、翻訳するという作業とか、また、ああいうピュアな言葉が出たけれども、あれはどういうコンテキスト、文脈に当てはめるといいかとかというのを少し考える時間を持つことも役割の一つではないかなと思ったりします。

最後は、私たちのユース団体自身もそうですけれども、私たちの場合、日々、国際の会議に出たりとかするというのもあつて、渡航費とか準備費というのが日々不足する傾向にあります。かつ、基本的にはボランティア活動でやっているのだから、なかなか地方にいる若者に東京に来てもらうとか、その辺もなかなかサポート体制を整えるのは非常に難しいところかなと思っています、それは皆さんと共有する悩みなのかと思っています。

日々こうやってユース代表とかと言われるのですけれども、代表性や包括性、多様性、私自身のバックグラウンドはどのぐらい検討されて私が呼ばれているのだろうというのは日々不安なところもありますし、そこはできるだけこういうふうに脆弱だからこそ、複数の若者をしっかり呼んでもらうように、子ども家庭庁だけでなく、各省庁に私も日々言っていますし、子ども家庭庁としても各省庁にしっかり言って、地方自治体とかにも言っていただきたいなと思っています。

さっきメールの話がすごく気になって、スケジュールやプロセスの不安につながるのかなと思ったりするのですけれども、JYPSにもものすごく案件がたくさん来ます。基本的に、ここで言っているか分からないですけれども、子ども大綱の話も、今月までに来てくださ

いみたいな話は、そういう意見とかをヒアリングしたいとかは最後にしわ寄せが行くのです。これは別に日本の国内だけでなく、国際のプロセスも同じです。

それというのは、確かにタイミングが合って行くという話でこどもの意見が反映されるのは、別に運命的にそれはいいかもしれないのですけれども、持続可能にこどもの意見を反映させるのに、スケジュール感がタイトで、あと3日で返信くださいみたいな、それは8年間かけて意見を聴く信頼関係を築いたみたいな話もありましたけれども、時間がかかることなので、スケジュール感、長期スパンを最初に提示いただけると、心の準備もできるのではないかなと思ったりしています。

最後のスライドがすごく肝なのですけれども、そんな感じで私の発表を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。（拍手）

○土肥委員長 ありがとうございます。

非常にいろいろな角度からの御報告を3ついただいたかなと思います。

7時半までに終わるということになっておりますので、あと14、15分ぐらいしかないのですけれども、委員の皆さんから御質問や御意見があればいただければと思います。

お願いします。

○古田委員 いろいろありがとうございました。

伺いたいことはたくさんありますけれども、1つ、うらほろスタイルの御発表でちょっと伺いたいことがあって質問させていただきます。

古田と申します。よろしくお願いいたします。

この委員会でもずっと議論があったところだと思うのですけれども、こども・若者の参加において、大人の側の在り方とか、大人の側がつくる環境とか関係性がすごく大事ということが本当にすごく分かる事例だなと思って聞いていました。だからこそちょっと伺いたいなと思うところとして、お話の中で、長年蓄積されてきたからこそ、関わる大人が、前の世代が経験したから次の世代にという意識で関わられているという話もあったのですけれども、そうした状態に至るまでがすごく大変だっただろうなと思うのです。例えばうらほろスタイルの活動をいいなと思って、うちの地域でも始めてみようと思った自治体からすると、どうやってそういった地域の大人の輪を広げていくかどうかというか、どういうふうにそういった理解であったり、こういう文化をつくっていったのかというところがすごく大事ななと思っていて、その辺り、何が鍵でというか、どういったことを意識しながら、あるいはどういったことを工夫しながら、まさにこどもとか若者の願いを本気で受け止めて、一緒に考えて実現するという大人の輪を広げていったのか、その辺りをぜひ伺いたいなと思って質問させていただきました。ぜひ教えてください。よろしくお願います。

○うらほろスタイル事務局本間さん どうもありがとうございます。

御期待されている回答になるかと疑わしいのですが、冒頭申し上げたように、まず1つは、本当にこのままでは地域を存続できないのではないかという危機感がある程度地域の

大人で共有されたところから出発したというのは逆に大きかったのかなと思います。

もう一つは、誰かが旗を振って広げていくようなスタイルですとか、最初に行政から出発していった活動ではなく、もともと草の根から始まったというか、PTA活動の一環として、こどもたちを地域で育てていこうというところから出発しまして、そこにまずこどもたちが自分の地域がこうなったらいいなとか、この町が好きだというふうなことをこどもたちから言葉で聴くと、ある意味、地域の存続の危機で、大人たちもこの地域の未来を半分諦めかけていたようなところですけども、こどもたちがそこまで素直にそういうふうにするのであれば、大人も答えたいというふうな意識なく、自然にそういう考えが広まっていたのかなという感想です。

そういう活動をPTA中心に当初行っていたところを、行政、町の事業として位置づけを行って、きちんと事務局を配置できるように予算化したりしていく中で、少しずつ時間をかけて広まっていたのかなというところかなと思います。

○古田委員 ありがとうございます。

最後にお話があった、こどもがそこまで言うのであれば応えたいなという、こどもたちがそこに率直に本当に思ったことが言えて、それを真剣に受け止めて、その小さな関係性をちゃんと無下にせずにとりかかるといふか、していくことがすごく大事なのだなということは、今、お話を伺いながら改めて感じました。ありがとうございます。

○土肥委員長 ありがとうございます。

ほかの委員の皆さん、いかがでしょうか。

もしよければ、今日まだ御発言されていない櫻井さんとか、貴戸さんとか。

では、貴戸さん、お願いします。

○貴戸委員 兵庫県の大学の教員をしております、不登校やひきこもりなどを経験した人たちと一緒に当事者研究の場をやっております。

感想になりますが、先ほどCoCoTELIさんの御発表の中にあつた「居場所と支援は別物」というお話がすごく示唆的だと思いました。「支援を目的とした居場所」と位置付けてしまうと、こどもたちが存在を受け止められにくくなるというお話だったかと思います。

不登校の文脈でもそうした懸念はあり、研究者のなかには「フリースクールなどで生きづらさの仕分けが生じている」と指摘する人もいます。つまり、目の前にいるのは、ホリスティックな存在としての一人のこどもであるはずなのだけれども、支援という枠組みで見るときに、「発達障害がある人はこの支援」「家庭の教育力に不足がある人だったらこっちの福祉的な支援」というふうに、全体的な存在としての個人を制度に沿って断片に切り分けていってしまうまなざしがあるのではないかと、ということなのです。

居場所もそうした制度的な支援の一つとして捉えられてしまうと、おかしなことになってしまうのではないかなと感じます。たとえば「まだ学校で勉強するまでには至らないけれども、家を出て人と話せそうな子だから」などというように、「学校復帰のステップ」として居場所が構想されると、こどもたちにとって安心したものではなくなってしまう可

能性があります。いろいろな場面で、そういうことが生じているのかなと思いました。

もう一点、今日は本当に若い方の話をいっぱい伺えてよかったです。ぼんばーの皆さんの率直なお言葉は、本当にすばらしいと思いました。ぼんばーの皆さんは、お聞きするところによりますと、ぷらすメンバーの中から作文と面接で選ばれている方たちですね。恐らくそれだけに責任感が強くて、「ぷらすメンバーの意見を吸い上げて代表しなければ」という思いを持っておられるのかなと思いました。

最後、田中さんが御発表の中でおっしゃっていたように、ただ、そういうところもすごく大事だと思うのですが、代表しなければとか、求められる若者、こども像を自分が演じなければみたいなふうになるのではなくて、自分が興味あることとかやってみたいことみたいなものを、せっかく与えられた機会ですので、ぜひ前面に出して、楽しんでやっていたらいいなというふうに思いました。

例えば企画班の方であれば、全体からやってみたいテーマを吸い上げてとかということももちろん大事なのですが、それと並行して、御自身が本当にやりたいテーマでいけんひろばを開いていけばいいと思うのです。ファシリテーターをやってみたいというような御意見もあったと思うのですが、だったら、「このテーマで私はファシリテーターをやりたい」と思うようなテーマを自分で選択して、ファシリテーションにどんどんチャレンジしていけたらとてもすばらしいなと思って伺っておりました。

以上、感想です。ありがとうございました。

○土肥委員長 ありがとうございます。

櫻井さんと安部さんも今日まででしたけれども、いかがですか。

○櫻井委員 では、私から。

今日は皆さん、様々なお話を聞かせてくださりありがとうございました。

私はGENCOURAGEという30歳以下のユースたちと一緒にジェンダー平等のために活動するというようなことをやっています、オンライン上でやっているのでも全国から様々な方が参加してくださっているのですが、今日皆さんの話にあったように、様々な若い人にどう参加してもらうのかは私もすごく日々悩みながら活動していて、ユースの声と言っても、ユースの声を全部代表できるわけではない、様々なユースがいるので、本当に皆さんの今日お話しして下さったことはもう共感しかないという感じでした。

その中で、例えば今日ここに耳が聞こえなかったりとか、目が見えない若い人が集っているかという、そうではなかったりしますし、もっともっと地方の人や障害がある人、様々な人をどう巻き込んでいくかというのは、恐らくこれからの課題になってくるのかなと思うので、今、始まったばかりなので、もっともっと皆さんと議論していきながら、より全国の若い人を巻き込んでいくためのいいプランみたいなものをつくっていけるとすごくいいのではないかなと思いました。

今、貴戸さんからもありましたけれども、何か代表しなければと思いがちで、そうすると緊張してしまって全然言いたいことを言えないというので、私も日々反省をしながらや

っているので、ぜひ、あまり緊張せずにできるような空間などもつくったりとか、あと、この間のこども大綱のヒアリングとかも、大人が結構いたりとかして、みんな緊張してしまうのではないかなと正直思ったりなんかもしたので、そういったところはうまいとか下手とか関係なく、若者がフラットに話せるような、若者と言っても年代が様々だと思うので、そこは今後工夫できるといいのではないかなと思いました。

以上です。

○土肥委員長 ありがとうございます。

安部さん、いかがですか。

○安部委員 ありがとうございます。

かれこれ30年近くこども参加を研究しています安部と申します。

今日はお話を伺わせていただいてありがとうございました。

皆さんによければお伺いしたいことがあります。最後にJYPSの田中さんが、ぼんぱ一の皆さんとか、あるいはうらほろスタイル事務局の皆さんのことに触れながら御自身の意見をお話くださったと思うのですけれども、今日、ほかの団体の方の話を聞いて、自分たちはこういうふう感じたみたいなことがあれば、発表者の方々にお話を伺えたらと思います。

○土肥委員長 ありがとうございます。

これは後半の発表者で大丈夫ですね。

○安部委員 ぼんぱ一の皆さんもそうですし、3団体の方もよければお願いできればと思います。

○土肥委員長 全員聞くと時間が漏れなく超過するということはあるのですけれども、超過する前提で進めていいのか、それともちょっとかいつまむか。それを聞いているとまた時間がなくなってしまうのですけれども、ぼんぱ一の皆さん、1人ずつ言うとなので、どなたかお一人かお二人かというふうにしたいのですが、まず、ぼんぱ一の方からいいですか。

○めがみさん（ぼんぱ一運営班） では、言わせていただきます。めがみです。ありがとうございます。

いろいろ聞いていて、確かに求められる人材像を自分で求めてしまっていたかなと思ったりとか、責任感みたいなものを感じてしまったかなというのも思って、やりたいことがこれから任期終わりまでできたらいいかなと思いました。ありがとうございます。

以上です。

○土肥委員長 では、発表者ということで、うらほろの皆さんから、よかったらどちらかお一言ずつでも。

○うらほろスタイル事務局上田さん ありがとうございます。

個人的には、自分自身が国の行政機関から小さな町に3年前に住まいも仕事も移しているので、国の政策にどうこども・若者たちの意見を反映させていくのかというのはすごく

共有する土壌が異なることもある中で進めることになるので、とても難しいなと感じました。私もそういうところの難しさも感じながら、お仕事もさせていただいたというのも思い起こしていました。

でも、今までの皆さんの御発言の中にもあったのですけれども、それぞれが面白いとか追求したいなと感じられることと、それを自分たちに関わり得る余地があると感じられるということ、そこを大事にしていければ、こういう小さい町でもですし、ちょっと違うフィールドでも、いろいろな立場の人が意見を出し合いながら、一緒に汗をかくということができるとかなと思って聞かせていただきました。

浦幌も、この規模で取り組みやすいところもあるのですけれども、ほかの2つの団体のお話も聞いて、これからの浦幌にも生かしていきたいなとも思いましたので、またこれからも交わりながら、御一緒できることがあればうれしいなと思います。

ありがとうございました。

○土肥委員長 では、お願いします。

○CoCoTELI平井さん お話を聞いていると、こども・若者の中でもいろいろなフェーズがあったりとか、いろいろな人たちがいるなというところで、例えば高校の偏差値があまりいいところではない、偏差値で測るのはあまりよくないかもしれないですけども、一般的に頭がいいと言われる高校とそうではない高校は、声の聴き方だったりとか、出てくる声とかも全然変わってくると思うというところとかも含めて、どの層にどんな施策が有効かみたいなことをもっとたくさんチャレンジして、効果検証とかもして行ってほしいなというのを個人的にすごく思ったのと、やはりこういうところに来て自分とかが話したときに、そこに大人の人たちが逆に意見しづらい雰囲気というのはあるのかなと思っていて、例えば困難な状況を経験した当事者の若者に、それは違うと思うと大人の人が言ったとしたら、その人が社会から消されそうになるとか、本当にそこまでは行かなかったとしても、その怖さを持っている人たちはかなりいるのではないかなと思っていて、どうそこを対等に話し合える状況をつくっていくのかみたいなところは、特にこども・若者というところの当事者参画というところですごく大事になってくるのではないかなというところは、自分がすごく守られ過ぎているなみたいなところを感じることはあって、すごく思っているということです。

以上です。

○土肥委員長 ありがとうございます。

そうしましたら、ちょっと時間が超過してしまったのですけれども、これで終わりにしたいと思います。

自分から2つだけコメントをさせていただければなと思ひまして、1つはいろいろな団体さんの報告を伺って、意見反映のチャンネルの複数性みたいなものは重要なのだろうなと思いました。というのは、JYPSの発表とかを聞いて特に思ったのですけれども、JYPSみたいな雰囲気が好きな若者たちと、こども若者★いけんぷらすという名前だけで、もうあま

り参加したくないみたいな若者たちもきっといるだろうなと思って、欧州のいろいろな事例を見ても様々なチャンネルが用意されているので、それをどういうふうに国としてつくっていくかということは今後の検討材料の一つかなと思いました。

もう一つは、今、既に各自治体でもこどもの意見反映の準備が下準備で事前調査し始めている自治体さんとかが非常に多くなってきていますけれども、この葛藤をうまく発信したいなと思って、葛藤しているのだということを、それはある意味、若者たちに対してもだと思えるのですけれども、意見を言ったのにちゃんと受け止めてもらえなかったとかということも、こちら側の言い訳になってしまうのですけれども、こんなに考えて困ってやっているのだみたいなことも併せて自治体側だったりとか子ども・若者に発信して、それはぼんぱ一の皆さんだったり葛藤もそうだと思うのですけれども、ここで悶々としていても仕方ないかなと思うので、難しいのですけれどもうまくそれを発信できるといいなと思ったところです。

十分に意見を言えなかった方もいらっしゃるかなと思いますけれども、これにて「子ども・若者参画及び意見反映専門委員会」の第3回を終了したいと思います。

今日御参加いただいたぼんぱ一の皆さん、発表いただいた団体の皆様、ありがとうございました。（拍手）